熊谷俳諧資料

一枚刷之部

特別
へ5
5799
1(1-89)

熊谷俳諧資料

一枚刷之部

一、寛政八丙辰歳旦
二、乙卯歳旦　千代女等　寛政八年
三、春興　雪江等　〃　九
四、花櫻の詠　丈左等　寛政七年
五、芭蕉堂雪中庵両評通り句　〃　八
六、春興　月樵等　寛政九年
七、〔春興〕　月樵等　〃　十
八、同　〃　〃
九、〔春興〕　月樵等　〃　十一
一〇、歳旦　武州玉井社中　〃　九
一一、春興　武州玉井社中　〃　十三
一二、奉納梅十詠句合　〃　八
一三、春興　雪中　空華等　〃　〃
一四、春興　雪中庵等　〃　〃
一五、三節　志計　〃　〃
一六、三節　黒花　〃　〃
一七、三節　經昇　〃　〃
一八、三節　楚岸　〃　〃
一九、春興　雪中庵等　〃　〃
二〇、〔春興〕　大江丸編　〃　〃
二一、〔春興〕　大江丸等　〃　〃
二二、〔春興〕　大江丸等　〃　〃
二三、〔春興〕　葛三等　〃　〃
二四、〔春興〕　葛三等　〃　〃
二五、歳旦春興　葛三等　〃　〃
二六、〔春興〕　雨什　〃　〃
二七、春興　阿波小松島社中　〃　〃
二八、春興　阿波小松島社中　〃　〃
二九、春興　阿波小松島社中　〃　〃
三〇、春興　越後塩沢社中　〃　〃
三一、春興　高入等　寛政八年
三二、春興　闇更等　〃　九
三三、〔春興〕　丈左等　〃　〃
三四、〔春興〕　祇雛等　〃　〃
三五、〔三節〕　鳳賀　〃　〃
三六、聖節春興　東吹等　寛政八年
三七、〔春興〕　来時等　〃　〃
三八、春詠　德風　〃　〃
三九、三節　其暁等　寛政八年四月
四〇、歳旦春興　梅二庵　〃　〃
四一、歳旦春興　千翁　〃　十年十一月
四二、三節　起雲　〃　六月
四三、春興　牧之等　〃　〃
四四、〔春興〕　花夕等　〃　〃
四五、春興　白蘆等　〃　〃
四六、〔春興〕　断簡　耕洲　〃　〃
四七、〔夏興〕　闇更等　〃　〃
四八、夏興　一無庵等　〃　〃
四九、〔隅田川探題〕　貞松等　〃　〃
五〇、未秋唫　一無庵等　〃　〃
五一、〔秋興〕　丈左等　〃　〃
五二、〔秋興〕　大江丸等　〃　〃
五三、〔秋興〕　大江丸等　〃　〃
五四、〔名月探題〕　大江丸等　〃　〃
五五、探題吟行　午心等　寛政八年
五六、秋興　肥後社中　〃　三
五七、〔秋興〕　晁山等　〃　七
五八、登山月詠　虎杖等　〃　八
五九、〔冬興〕　月居等　寛政十年
六〇、〔冬興〕　大江丸等　〃　十
六一、〔冬興〕　旧国等　寛政八年
六二、〔冬興〕　大江丸等　〃　九
六三、六華　月居等　〃　〃
六四、〔冬興〕　闇更　〃　〃
六五、〔芭蕉己心句帖〕　闇更等　寛政八年
六六、奉納芭蕉堂雪中庵両評句合　〃　八
六七、小松原探題　一茶等　〃　九
六八、題時雨　松坂連　〃　〃
六九、題雪　高入等　寛政八年
七〇、好文軒月並　〃　十一
七一、〔月並〕　耕洲撰　〃　九
七二、月次　耕洲撰　〃　十年十一月
七三、月次　耕洲撰　〃　六月
七四、月並三月、部　一無庵撰　〃　十月
七五、〔月並〕　其風撰　寛政八年四月
七六、〔陽松庵句會句帖〕　温等　寛政十年十月
七七、〔蜂友歓迎句帖〕　寛政八年
七八、〔都雀等歓迎句帖〕　〃　六月
七九、〔春蟻歓迎句帖〕　〃　十月
八〇、〔湖舟追善句帖〕
八一、嘯雲常和我石居士追悼
八二、〔其賈毋追善句帖〕
八三、〔吾山追善狂歌〕　寛政十一年
八四、〔歸童雜髪發句〕　〃　四
八五、留別　貞松　〃　八
八六、〔書會俳諧大會通知状〕　寛政四年
八七、〔奉納受取　〃　八
八八、〔包紙〕　寛政十年
八九、〔包紙〕

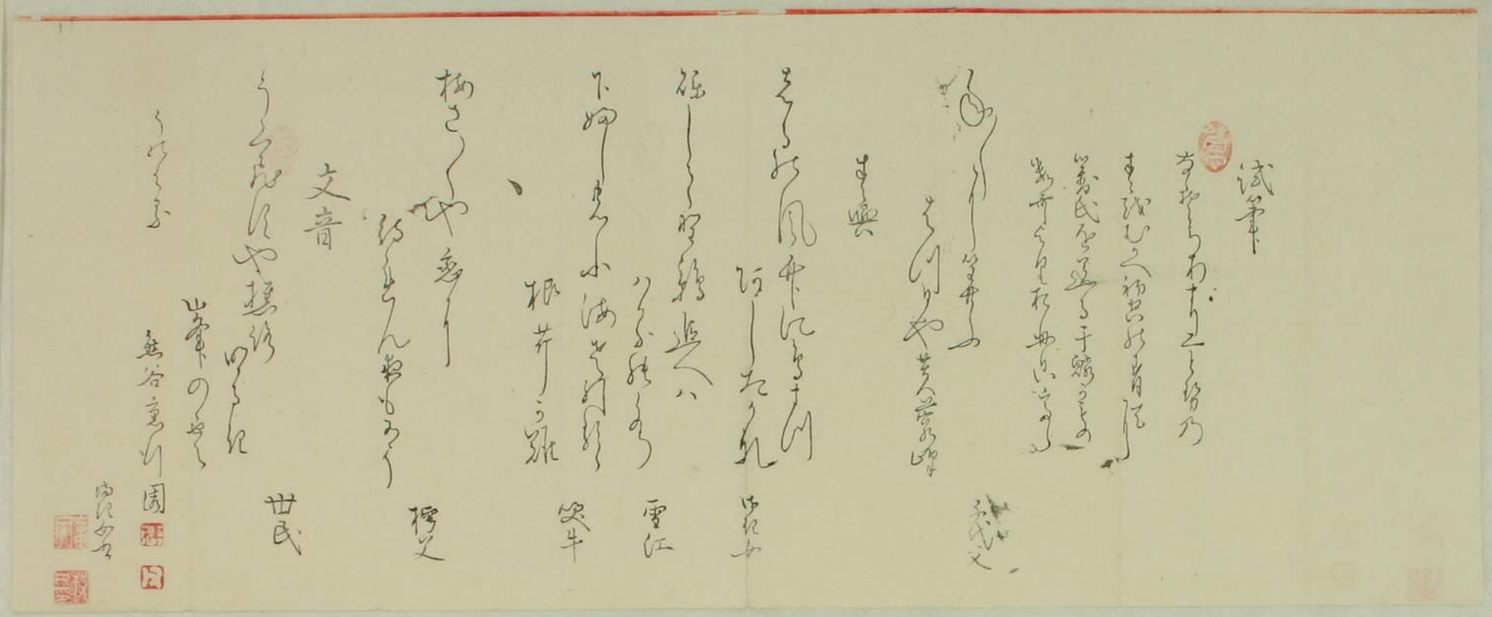
一、寛政八丙辰歳旦　画釣人等

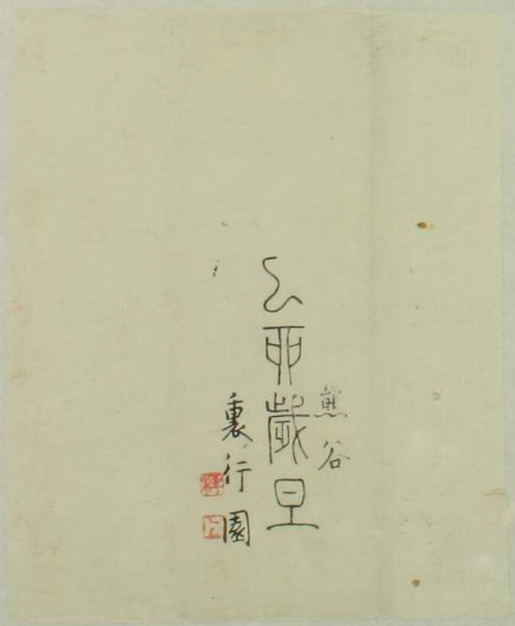
寛政八丙辰歳旦

土州田野浦在赤岡

画釣人

二、乙卯歳旦　木村父等　寛政七年





三、春興　雪江等　寛政八年

本興

菽入や姉ゟ小詩の針ぬ買ふ（玉樹亭）ぬ陰
夕東風や風呂に見ゆ瀑町、

○

昔誰ゟめゟれせぬ木戸塚の梅（五雲園）（ゟ木戸利）
其の春や三陽ちやれ里ぬ家（ロ朽木）（朴亭）尺樹
楷多き浪ゟ古の三やまもの月（武然公）（生之松井）雪江
辰のちれ

龍田舎

四、花櫻の詠

花櫻の詠

見る又さ入れなり月の雁櫻　宜橋
雲や花や交りて峯の白い　五陸
そつきかれもらく雪の白ふな案　南曉
暮てもし春や菜櫻雁をとら　東鳥
大宮の花やまらひの持せなり　桃李
雁さらをさらなりまて暮生なり　箕風
時交の花三つ事なり月の嶺（イセ）　曲郎

次ノ御わらまに於ひ事

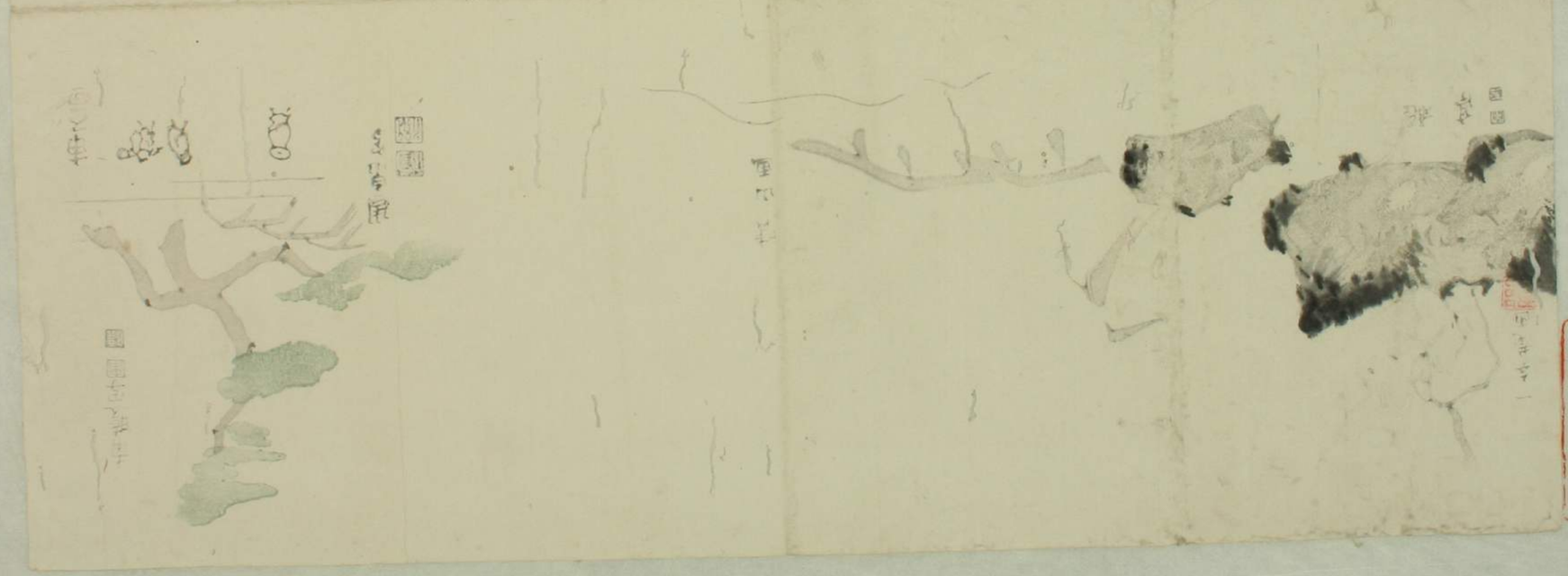
日暮ても花の下臥ぞめしあり　寸草（左京 姫路）
牛の子つれ花の夕日や東山　周泉

○

月夜鳥花の飛鳥と成ぶなり　雪江（武州 熊谷）
夜直を花の楷のまと見川　古江

○

大井川て鐫を洗や山さなり　嘯山
翌日あしと待もきのふの初桜　定雅
白雲を見るまへ花の浮しなり　士朗
夜夜てさらを埋む桜一夜　甫尺
京上の鳥も飛ぶなり旅の花　闌更
夕さらをそつれしの風ぬ絞　文左



龍田舎

芭蕉堂
雪中庵　両評　通り句

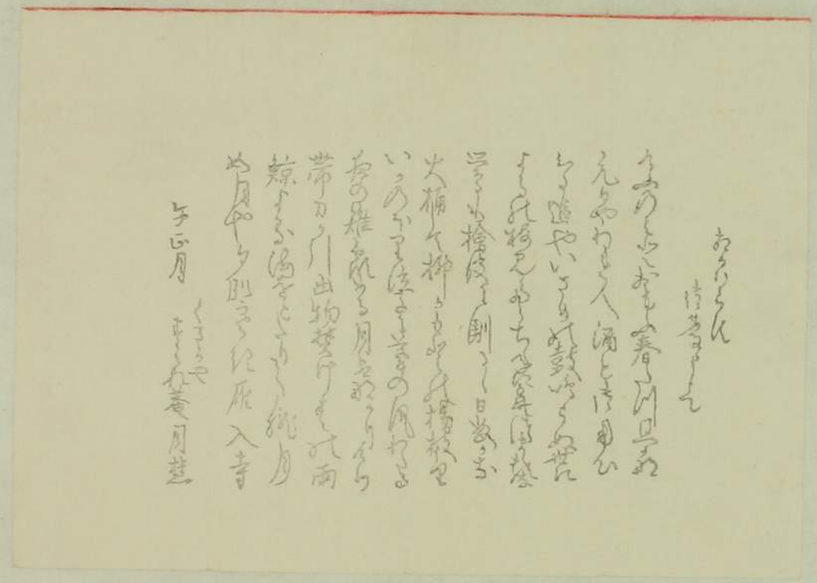
春興

[illegible]　武内[illegible]　古江
[illegible]
嵐山の[illegible]　同
[illegible]　日中[illegible]
[illegible]　[illegible]　同
[illegible]　日乗
[illegible]　得之
[illegible]
[illegible]　同
[illegible]　[illegible]谷[illegible]　月樵
[illegible]
[illegible]　酬[illegible]江[illegible]
[illegible]　[illegible]　喬國
[illegible]
[illegible]　[illegible]　貞松
[illegible]　洛一亜[illegible]
[illegible]　江[illegible]　重厚
[illegible]
[illegible]　京芭蕉堂　關更
[illegible]

寛政九巳春

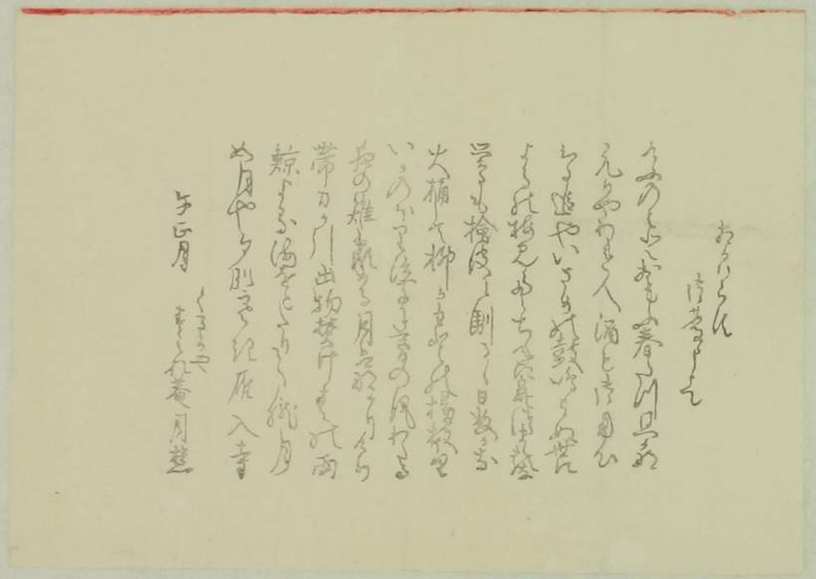
原守永彫刻

七、〔春興〕月想等　寛政十年

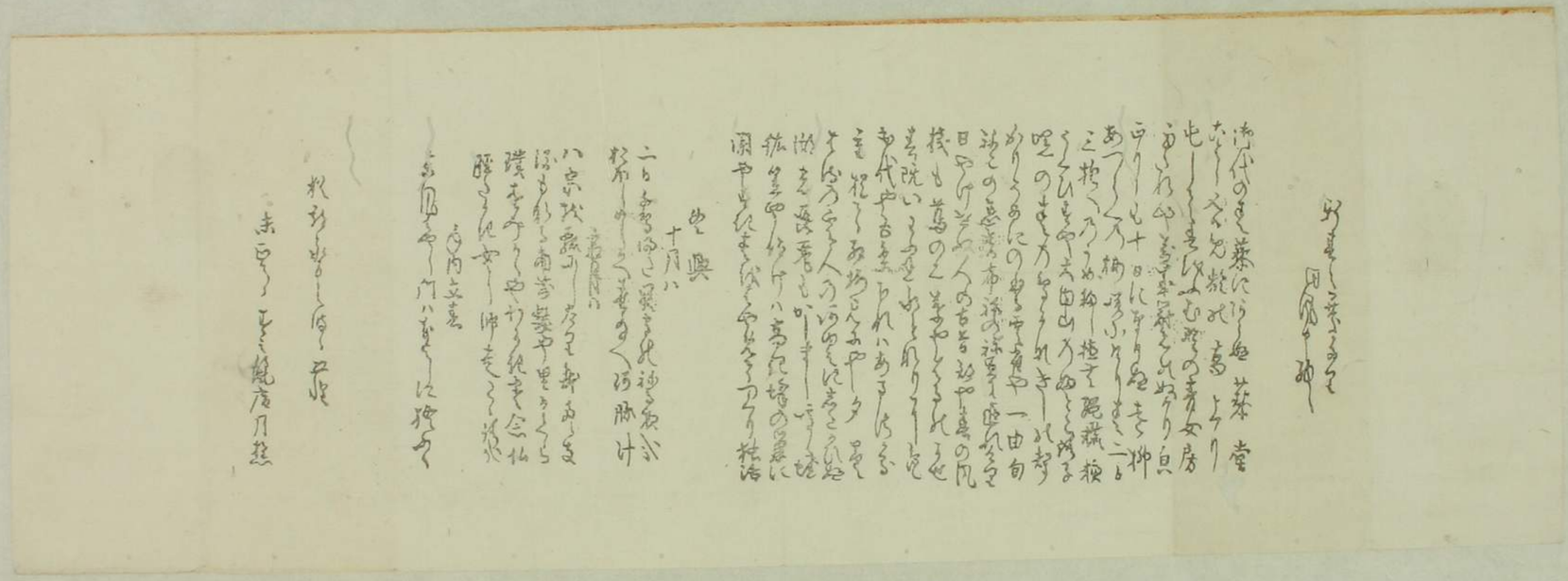


八、〔春興〕 月椎一等 寛政十年

龍田舎



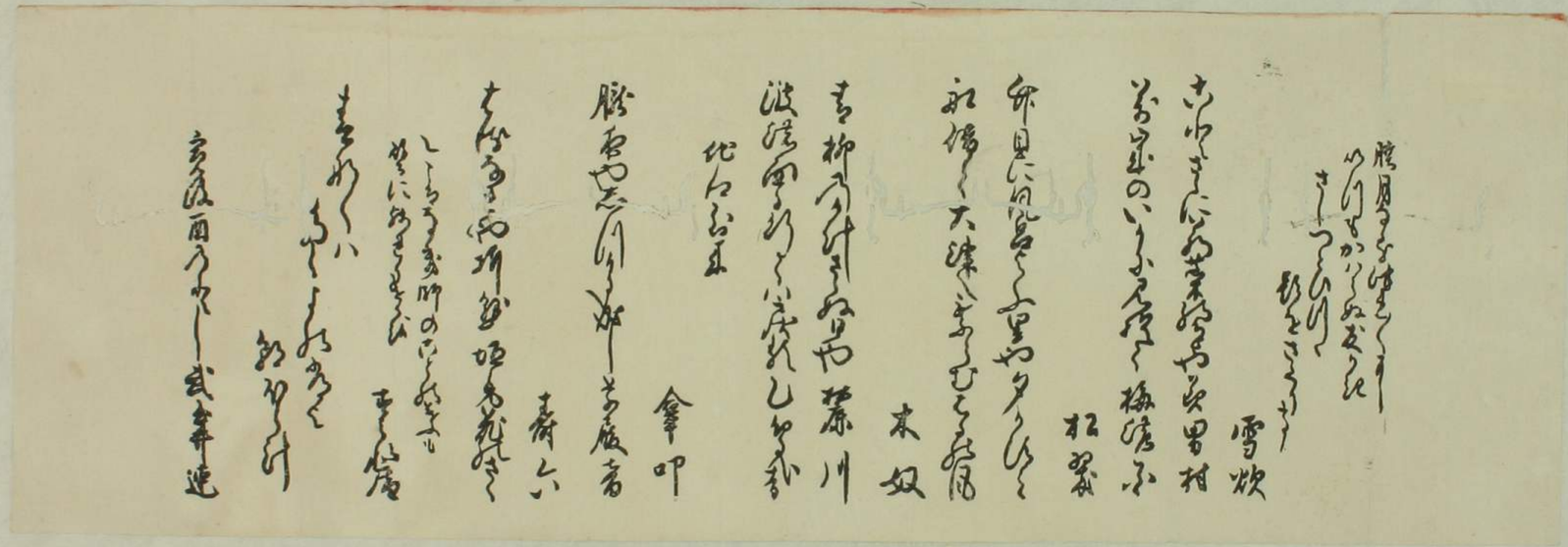
九、〔春興八〕月樵　寛政十一年



龍田舎

一〇、歳旦　武州玉井在中　寛政九年

二 春興 武州玉井社中 寛政十三年



雪炊

松翠

木奴

傘叩

壽六

11

二二、奉納梅十詠句合　寛政八年

奉納梅十詠句合

評　嗽石

轍之

灃水

梅か香にちらされ[illegible]松の香もあらす　相大嶋　嗽石

むかしから[illegible]梅の[illegible]　武飯能　轍之

すゝめらに[illegible]尺基の向ふりかな　おなじく

[illegible]祖之人梅ちる草の葉に[illegible]　相宮本　九皐

梅か枝に[illegible]隠家哉　相糸沢　清嵐

古里や表[illegible]の宿のんき　、篠光

むめの花に咲て[illegible]　嗽石

梅に行し袋に花の[illegible]　武八王子　東枝

棹ゝけの梅に掛る[illegible]ひき思　、梅門

霜の香の梅にされゆく[illegible]梅[illegible]　相高柳　徐雍

[illegible]月ののんき　相大山　春曙

鐘の音は梅か香清き山路かな　武八地　[illegible]

に梅[illegible]の[illegible]　、柳也

むかし問へと[illegible]重[illegible]　、哥留

萩さかの梅いたし手に白ひける　武八王子　楳楓

梅に風[illegible]里の月探[illegible]　武志川　松林

むかしあふに[illegible]手にかけ水　武小多久不　灃水

梅咲て探りにひ[illegible]もとり[illegible]　武花川　暁雨

梅咲[illegible]の子ら[illegible]　武熊谷　月樵

むめの花あら[illegible]の[illegible]　武吉見　耳風

梅咲て[illegible]　、丘路

一三、春興　雪中空華等　寛政八年

春興

[illegible]　亀峰
[illegible]　東里
[illegible]　花斜
[illegible]　自口
[illegible]　盟鴎
[illegible]　淵珠

○

[illegible]　午心
[illegible]　禹肝
[illegible]　雪中空華

寛政八辰春

[illegible]田[illegible]

一四 春興 雪中庵社中 寛政八年

雪の面雪解の雲に梨子の雪　去艸
春の雪眼のあるより利降日和　萬来
けるの雪嶂にのかりて尽る日本　文虹
春の日鶴ゆく屋まるが関澄に　完馬
京ゆくや一吹ふる紀春の風　砂明
春柳に庭にて宮し二日月　臥牛
うくひすや下ゆく水のむりしハ　来儀
春の根や面の柏の蔵る音　烟波
潮の春にふる川なるなり繊月　可拾
新しく紀神を祈なり粧子の春　春醉
春の風春もある松の木中しか　思明
堂かる松の御やきしの春　福和
七十里雖に降ゆ春けるの為　玉沙
もし紀雪和山けるに降日のに　釣魚
手所田の活聲に柳の車　狸兄
志し梅や共日の雪を叢神る　白居
堂や好手にこの紀光　杉　盟鴎
なれるにや小に紀つくし松の霜　馬来

○

青柳やひとり日に化く雪の上　徐生
新に集く白魚雪む雪時月　馬肝
堂や樹下を流れ水を友　午心

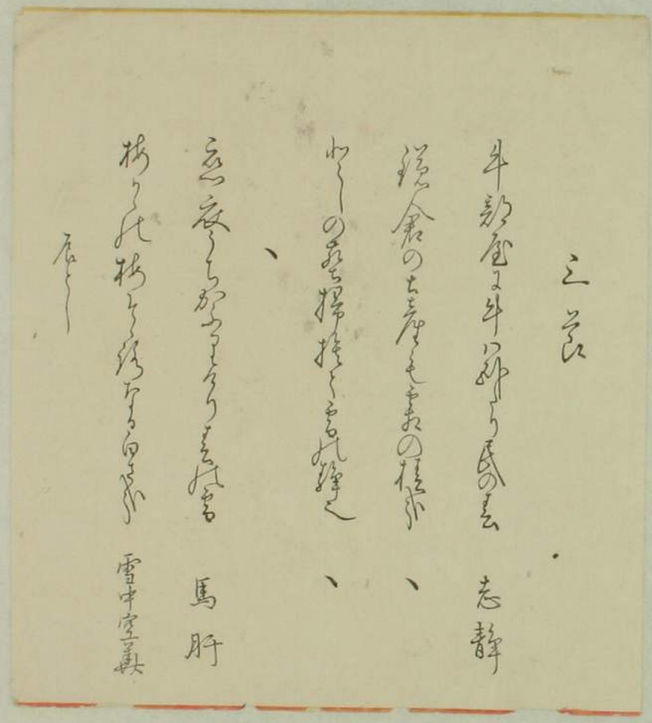
○

陽光や児のうちよる　樂太皷　雪中庵

寛政八年春

一五 三節 志計 寛政八年

三節



牛部屋に牛は郎より民の去　志静

猶倉の古屋も春の様子　、

ゆくしの春ち掃捨ても此鐘之　、

、

忘夜ちかゝるとりまた曾　馬肝

掃り此掃を待ちる白さ　雪中空真

居とし

[illegible]田[illegible]

一六、三節 黒花　寛政八年

三節

惠寸譜の頃のきに
移記ものと書の作りて

行る志や神し美の櫻飯　雪生園　黒花

桂原木の裏に黒あり銚匂、

黒河の遠に年をなて

終し新和や衡野に隅田川、

○

運坂を越えて無恵文　景姫人　馬行

柳境の新船
清月に乗しまものら　雪中空美

寛政八年

一七、三節　鯉昇　寛政八年

三節

夜くたれは庭に花かし男　遠西川　鯉昇

江をうつる秋の様や旭に梅の花　丶

帳はらしてきゝ人の五之年の宿　丶

○

ぶるや小さ戸明ぬ霜の行　午心

軸

三尺れ本も　蕪まりて積つり事　雪中菴

寛政八辰春

八、三節　楚岸　寛政八年

三節

何とか我心の種やさし硯　蝸牛堂　楚岸

梅咲ちり月ゝ様に見ひけるも　丶

頂戴ゝ俗と志らぬや除夜の雪　丶

丶

琴ゝ書ゝ耳すまさゝ夜の余宗哉　雨静

丶

西に入る日を雲にかて梅うれ　雪中菴

辰年春

朝倉口製刀

一九、春興、雪中庵等　寛政八年

二〇、「春興」 大江丸編 寛政八年

春柳お姉のうきはい
ちんぽかぬ　春甫

目の糸丸蔵まり
かゝれり乗手花香秋

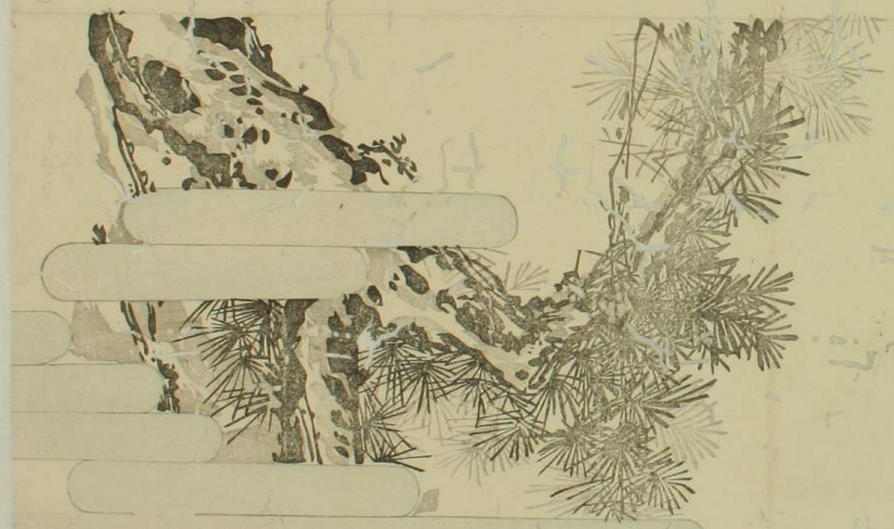
ちる楮しつ心なく
抱く様　八千

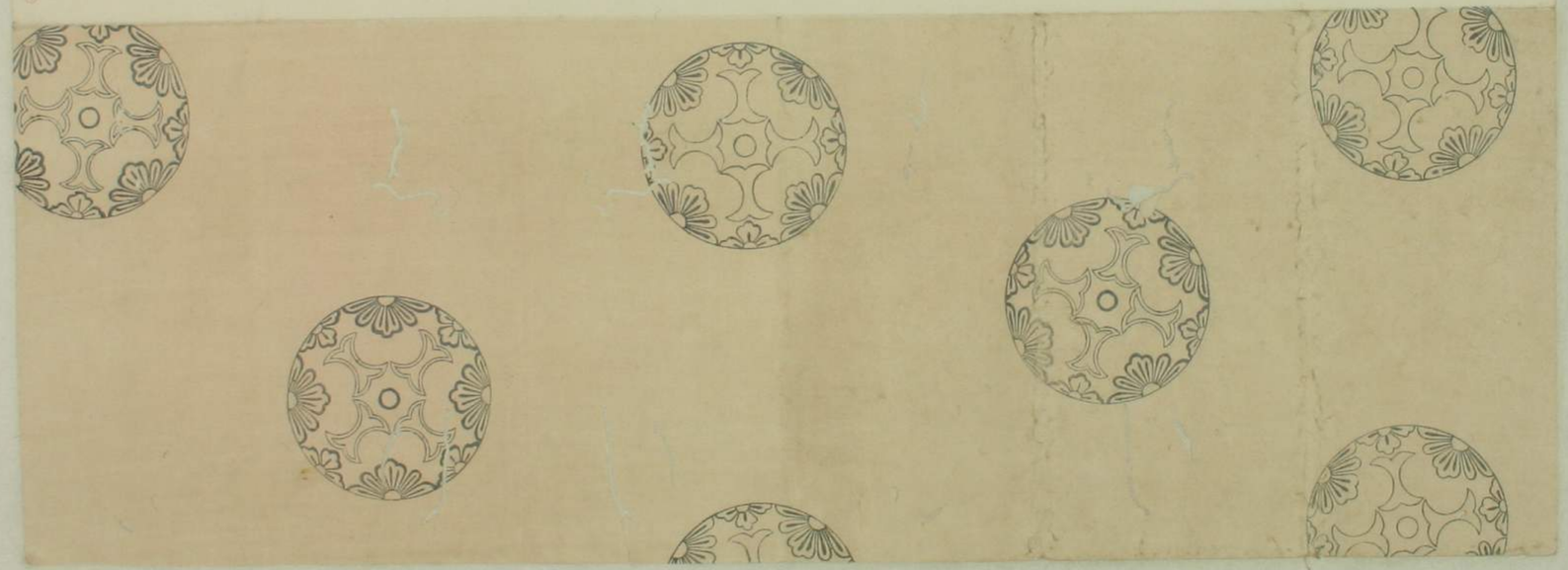
二日無くこゝにすへの
まりしし　旧國

ふりあふやむめの流水
二三尺　雪中

山里や結のさまし
あさかすゝ　月居

出かたりや
汝ゝ家ゝ仏ゝ母ゝ仏ゝ　関更



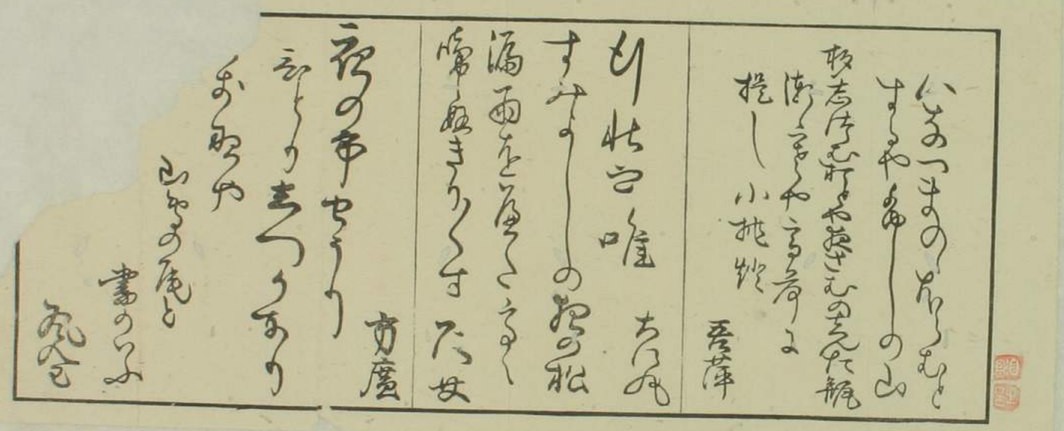


大江旧國

二二〔春興〕 大江丸等

いなつまのたらむと
するやあしの山
板志法むすやおさむのえた瓶
漸こまやうる所に
捨し 小桃鈴 吾萍

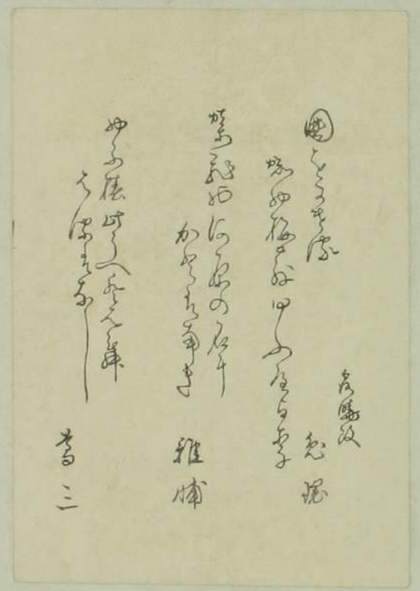
もり 牡宮 唯 ちりぬ
すみよしの御の松
漏雨をうくてうく
常無きりくす 花女



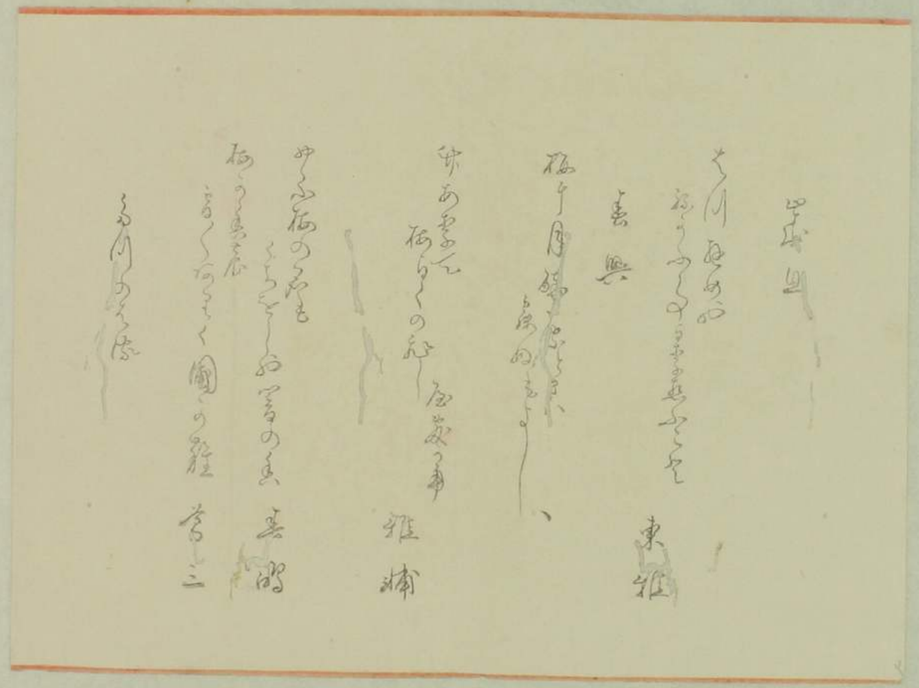
初の市せうり 方廣
ことりまつりまつり
おもひや
山ゆの尾と
書のいふ
丸合

十二景
河是道

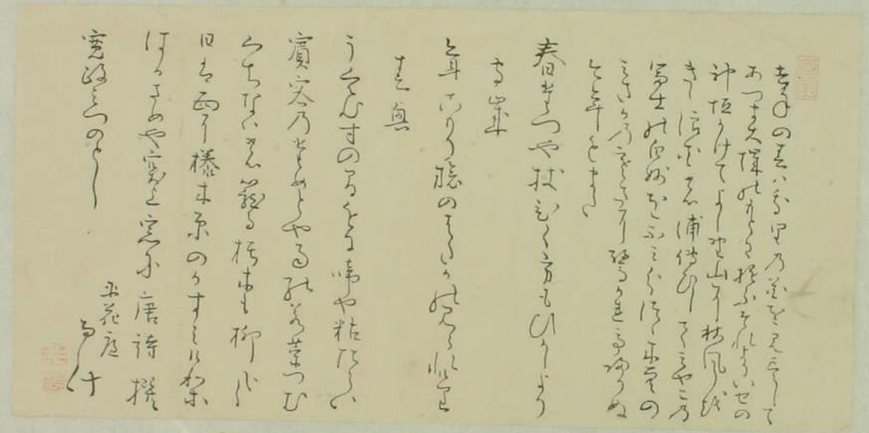
三四、〔春興〕葛三峯



三五、歳旦春興　葛三筆　寛政八年



二六〔春興〕雨什　寛政三年



二七、春興、阿波小松島在中　寛政七年

寛政乙卯年　阿州小松島連中

春興

二八、春興　阿波小松島連中　寛政八年

寛政八丙辰

阿波小松島連中

春興

手まくらに只一杯の梅の目　起風

大磯の藥地のそらへ柳哉　霰渓

井蔵に雪ゆや惠乃さん　可雪

蔵舟へ移る梅の匂ふ徹身　奇峰

もしられぬ夜机ありて宗の梅　宇嶋

梅打ぬいはれやもとゝ二日月　方花

やり梅子に菊はてゝしれぬ梅哉　汕舟

烟寺に鶯仲ありて梅哉　桃鯉

鶯もやたゝく梅乃拂ふてい　寵里

寛政十戊午歳　阿波小松嶋連中

春興

月いおり朔打ち出や松の花　可雪

覚ぬるやうらゝや枝の雪　奇峰

暖のそら引出しや雄よの声　霞渓

和らやまの内の二千余　起颯

汲さてはの幅奏しうら月　桃鯉

先り袖手拙ひ始めの声　宇嶋

連ま沙の和合傘や春の雨　文枝

屠蘇酔のさめぬ間もうらの松明のうら　冠里

寛政十戊午歳　阿波小松嶋連中

春興

月いおり朔打ち出や松の花　可雪

覚ぬるやうらゝや枝の雪　奇峰

暖のそら引出しや雄よの声　霞渓

和らやまの内の二千余　起颯

汲さてはの幅奏しうら月　桃鯉

先り袖手拙ひ始めの声　宇嶋

連ま沙の和合傘や春の雨　文枝

屠蘇酔のさめぬ間もうらの松明のうら　冠里

元、春興　阿波小松島連中　寛政十年

三〇、春興 越後塩沢社中 寛政十年

寛政十戊午

北越塩澤

歳旦

若菜つむ袂と言んと
あらたまる宗旨ものの懐
四方千代ゆまりて山川
目のあたりに斜かれを

楓館 茂兮

山や川只静なりけり去り行く年

三ツ物

世の中や世に中と知るを鶴の声 文鳥堂 扇廼
二ないに拝し門く北松 茂兮
小笠原の袂へ消え去りて 含興

春興

鶴のまじ庭の隅より梅の花 含興
晴の風千度ゆる柳の月 巴涼
鶯や八湖へ年始と都人 佳朝
木実の花に渡り草の流れ 左楝
夕風や川の向ひに藤を雇 木可
きよす帰る鶯やそら根の雪あそ迄 茂兮

全

梅か香や 芦笙
紙子停や小石流るゝ 里芳
加茂河原ころもかへて 釈 其律
京の町 、良忍
若菜 松翠
ゆふくと柳かな 青圃
梅宇
鶯やかおもて乾くものゝ 可栄
志好
倚柳
梅の香や戸明て入れる月 北川
行雨
丸中も男も 仙路
寒や 布支
彼岸橋 鳳羽
菫や 枕圃
竹仙
鶯や 呈英
山吹や小鳥の 牧之

己ノ大尾

周月菴 牧水

東待居北 松永小

三、春興 尚入等　寛政八年

春興

伊豆おとそ彼の平や春の風　雪濤
春風や牛にまかせる舎人方　未好
散るこそに飛ハ咲りけり春のかせ　古行
春の風靜に雪乃流ケリ　徐来
春風や秋の雪を志れ行者　可夜
和人乃うて服ぬくやもるの風　始牛

○

行ゑに戻る　蓉や　もるゆき　りを　尚入
　　芝西庵

辰のとし

龍田舎

三二 春興 闌更等 寛政九年

寛政九丁巳年

試毫

杜鵑菴 樗山

青柳乃ヶ芽尚出し
初日影

春興

仝

寒ム々ほと仮ヶ居ニ寄り
梅林

蘭云莫乃追ニ咲し
日和成

鬼夕

其乃ニ毎し鳥ニ鳥ニ
眠ニ寄り

芭蕉堂 闌更

年蓄

大三十日一ト日短し
夏乃市

樗山

三三、〔春興〕 丈左等

似鳩居士世ヲいふそつ至し
し見れども見よせる雖し三五
菴子予にあるしせまるまゝひ
活ク愛ク也とゝ至命を景至
ゑ花鳥れめいほ人いまゝ心き
ゝてとゝ寺流の人ゝいさゝけ流
ゆゑ御見物を居故春そ
あるとゝ流

花ヲ禁茶ゝるや有のさ生をゆ 上七三五菴 百童

春日探訪

雨ぬくむ夕ゝ掛の志ゝるゝか 奥淵
見ておさし 即 小鳥ヲかえ至 与 青列
春ヲ漸雨飛しう花もふなり 寛鳥
山坊ゝ出太刀見よや縣めし 梅水
とけ小至と岳を柿ヲ夕月抱 二扇
むら松の朧ゝ出て夜ヲ不二 有物
きを雲日をむら松ヲ光流之 柿芽
門通流人稀ふ寺ゝ春ヲ風 馬紅
学前 蓑をのく見るに 蝶 抱ふ 如旭
。
升ゆを掛ヲ朝日をさい 待ゝ 釵二
春の風松ハ古葉らゝかはし 山行
月ゝ花ヲ物 奏 自立ゆゑ 紫陌
。
恨めし花ゝに帰や 春ゝ花洛 百池
町の蝶もへた方のあゝけあり 蒼虬
柿を至朝の日和と成ゆけ里 栗下
芋菜一束升四五ゆのあり工ミなれ
百童法ゆゑ風雅ハルを構へらゐを
祝ひて
世の中を掛ヲ巣作る法ゆゑ 丈左

三四、「春興」 祇雄

春の山や眠く那るとれ壁の月　祇雄

古学のあるを嬉しき若葉哉　文羊

子ともなる梅ちらしられまくさかも　その雄

喩や蛙山家ハ飯のしるまき那里　蓬山

山茶花のちるまでしまる夾の月　無外

囲炉裏まで月ハ出しかな　新夏　玉副

[illegible]　東鴿

山雀の巣を出れ鳴る路の臺　石齋

[illegible]　雅詩

宮城野や萩学萌てるの甲ひ　樗[illegible]

文音

あまとら紙と屋すゝふ

さまやこちの蝶　[illegible]

[illegible]野の[illegible]

あ[illegible]　[illegible]

腔月野の梅[illegible]

[illegible]　乙二

楠の辟木なる[illegible]

のとく那れ　庸々

雀よりも宰久ひすの

[illegible]　常南

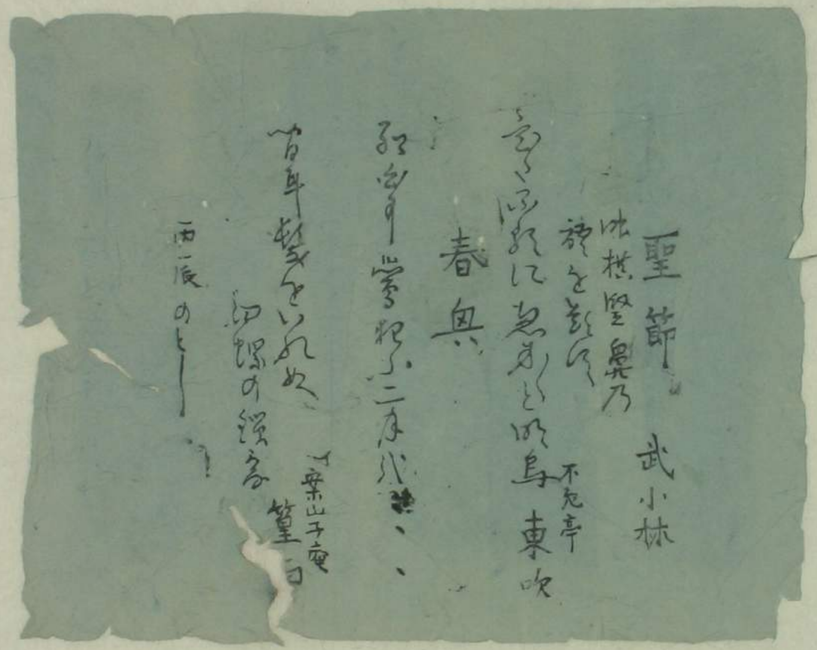
[illegible]の日[illegible]

[illegible]　笞菴

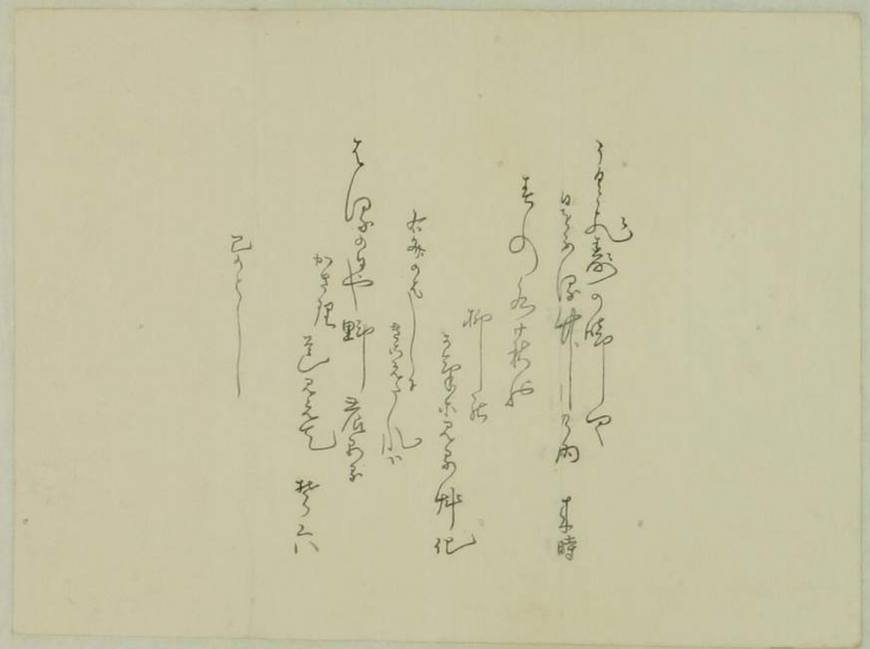
三五〔三節〕鳳聲　寛政七年

三六、聖節春興　東吹亭　寛政八年

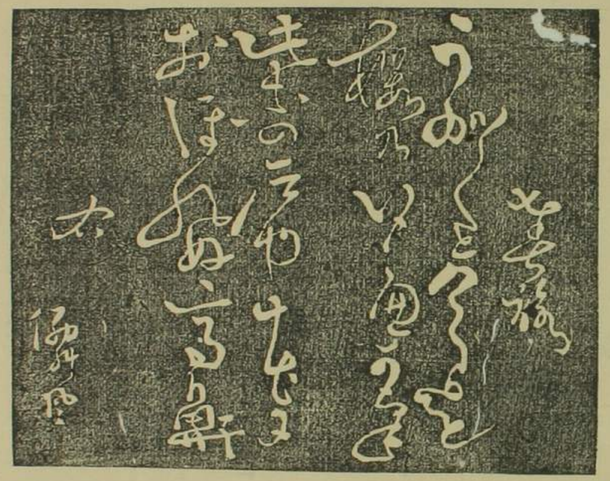
聖節　武小林



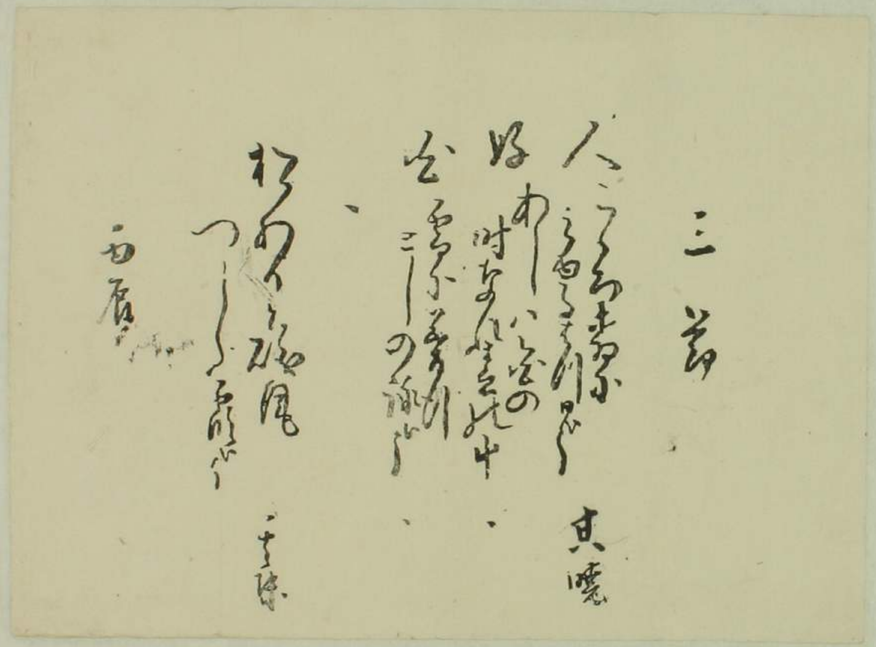
三七、〔春興〕 来時等　寛政九年



三八 春詠 僊風



三九、三節 其曉等 寛政八年



三節

其曉

四、歳旦春興 梅簾 寛政十一年

未歳旦

梅簾

風雪[illegible]日相皆[illegible]を[illegible]

町並に戸[illegible]代や大三十日

春興

梅に来て老[illegible]喃[illegible]も

[illegible]

採茶庵

梅人

四歳旦春興　千翅　寛政十一年

四三節 起雲

寛政十一年

巳未
三節

いふ言ふ皆
の[illegible]も別し　玉の夫
梅りつゝ文まなふ日の餘りとも
とし此梅かゝらは隣なるとなり
、
古雲の小町も
見ゝ学猿迎し
あゝ聞しそ　鬢中の
志めまつゝ夫の霄

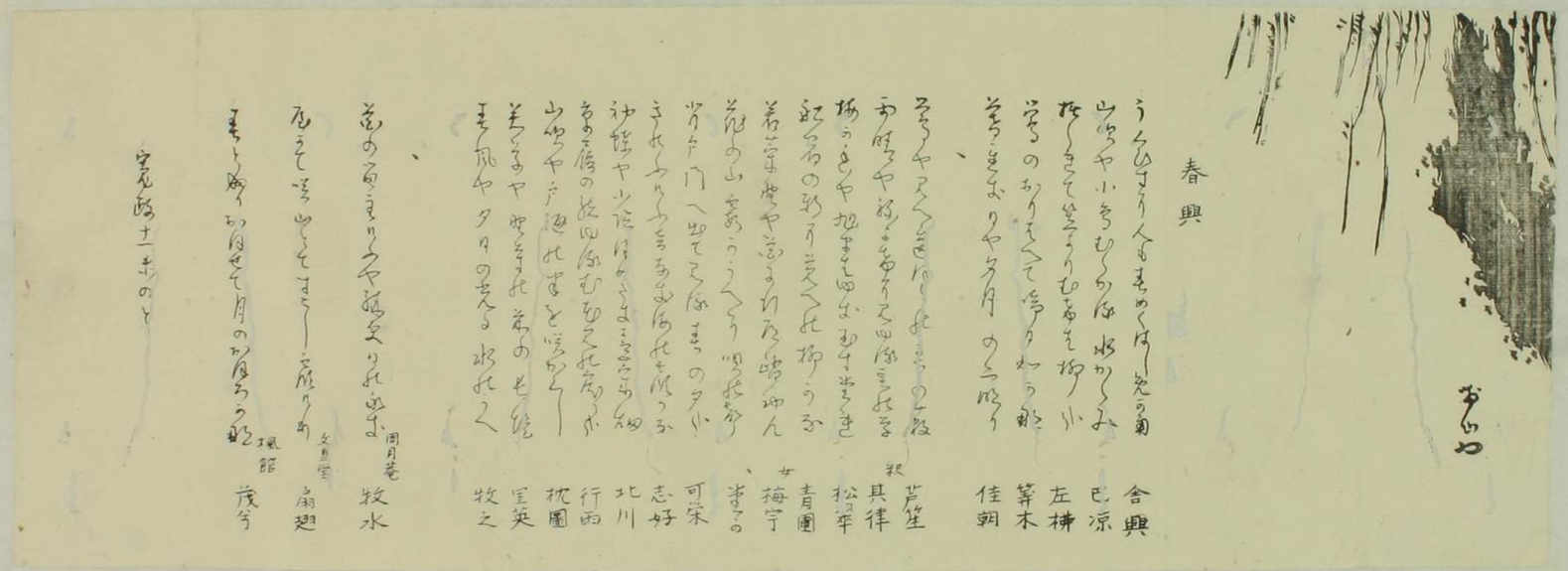
竜峯舎
起雲

鈍彼菴
翠兄

老耆菓
宜麦

龍田舎

四三 春興 牧之等 寛政十一年



春興

うくひすり人も春めくはし兎の菊　舎興
山ぬや小鳥むらかほ水かくみ　巳涼
桜しきて笠ありむあそ柳小　左柿
鶯のおりそへて鳥ゆ知の船　箒木
笠ことおりや夕月のこ照り　佳朝

、

鶯や見へ遠にしれ三の十殺　芦笙
雨晴や鶯ゆ春りて山ぬ三れ草　具律
柳の色や地まそ山ぬ春ゆ　松翠
紅石の新り見へ此柳のる　青圃
若葉雲や蒼ゆ行ゆ鳴ゆん　梅宇
花の山ゆ春うくり明れ春　、
背戸門へ出て見ぬ春の夕小　可栄
きれふりつ去ぬ春ゆ此ゆ　志好
神鳴や少陰はめさまこ烟　北川
春の宿の枝山ぬむ見れ扇ゆ　行雨
山ぬや戸遠れ雪を咲かし　枕圃
美しきや雲ゆ春れ蒼の毛絵　宝英
春風や夕日の去る水れく　牧之

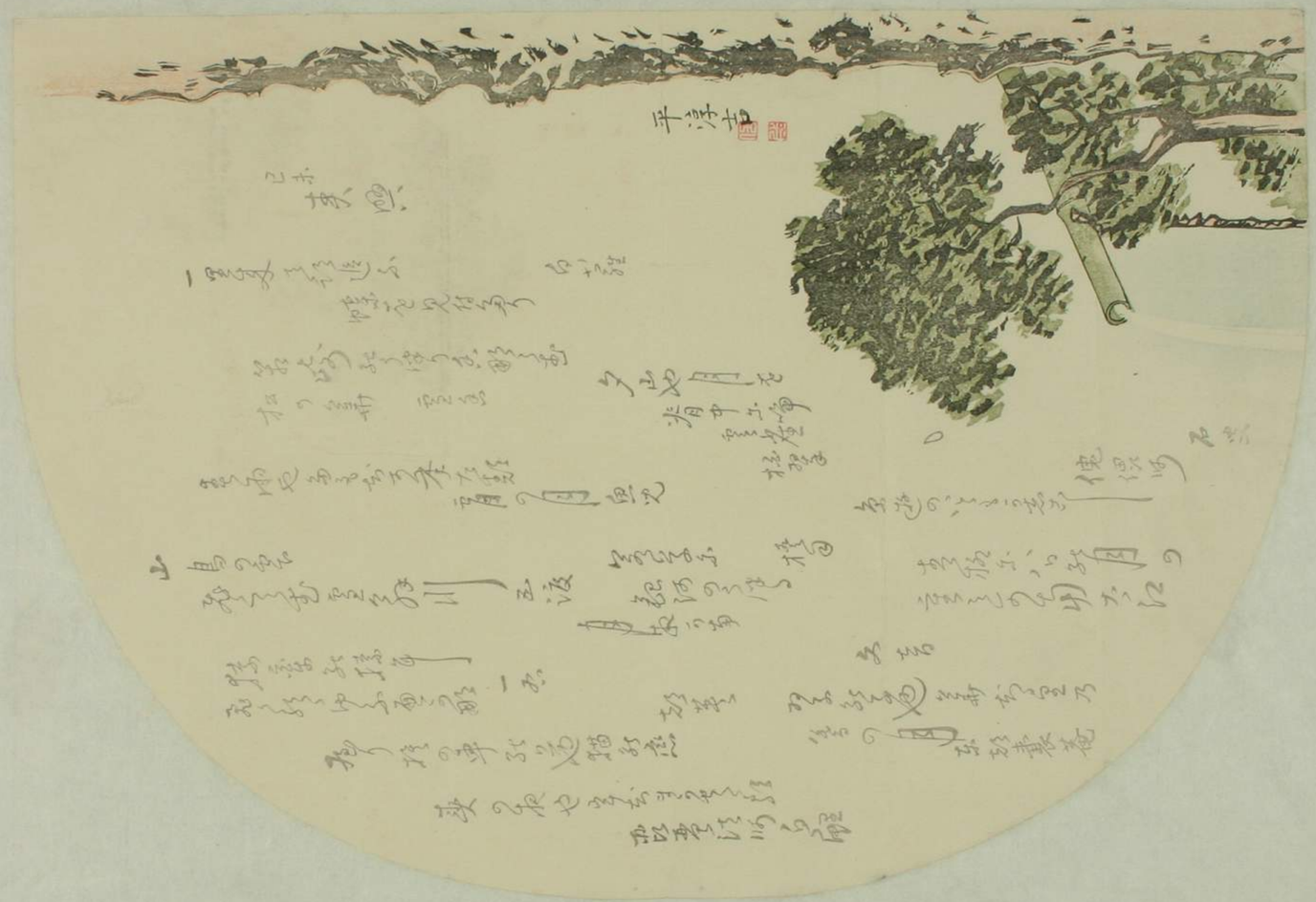
、

蒼の面まりつや鶯ゆ見れ水　周月菴　牧水
尾ゆて咲山とてまこし　文皇堂　扇翅
春と成り月せて月の月ちう船　楓館　茂兮

寛政十一年のと

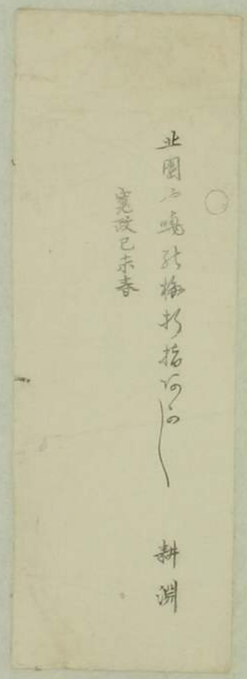
四、「春興」花々等　寛政十一年

四五 春興 白蘭等 寛政十一年



鳥居清忠

四六 春興斷簡 耕淵 寛政十一年



北園に嘯て梅杉指向にし

寛政己未春

耕淵

[illegible]

四七、〔夏興〕 闌更等

水仙也三日見清光てうつくゝある　在京 紗言

春山や焚干遠見すたらみ　洛 松蒼

麦前の山ゝ[illegible]海見日新石、土卵

一面の草落り松山のはれ雪、芦涯

崩の海や風呂して東の人ゆ見る　東武 貞松

可の春留の禅の春雨もはめ

終りは覚へさ[illegible]覚方の一

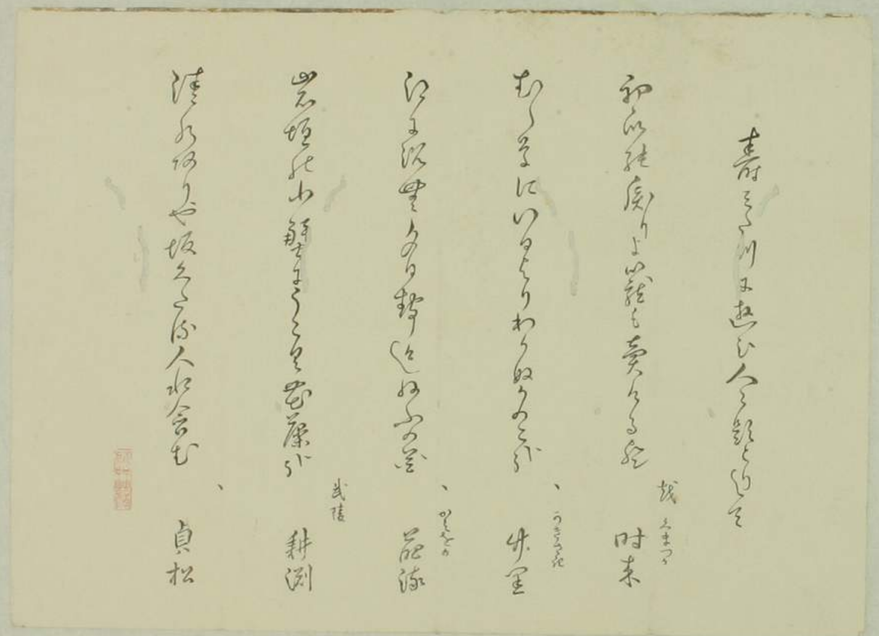
声とゝ老の耳ゆも残りられは

秋叩汝志し寒やほとゝ[illegible]　洛芭蕉堂 闌更

[illegible]田[illegible]

夏興

龍田文庫



五〇 未秋唫 一無庵等

未秋唫

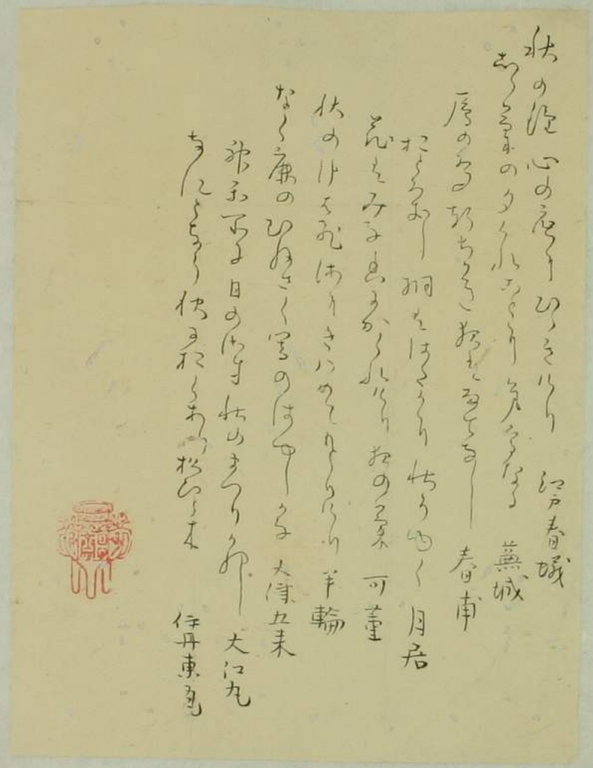
霧雨は才に入日をふくむなり　楚雀
秋雲は降と見えて菊夜枕　官父
床しきは只葉ゝに秋の柚の黄ゝ　柏梁
霞志ゝ秋蝶や翅伐出ゝ歩　闌鴉
志ゝ菊は白れを底ゝ水流ゝ　蒼山
り穐の家図西や小蓑上　椽三
むさくと養ふものゝを菊の忌　涼五
石の音出ゝ入て蝶のり　應郁
二三人四五人寄し后の月　洛栗下
森て聞ハ風出ゝ見れば　忌まゝき　一無庵

五一 〔秋興〕 丈左等

洛は一無菴のあるしを家ずかりて
と見成を勝田の何ぞしりいさぶ
ひとしきこれ夏もしまれ杖子を杖の
風雅の就り探て各々拵ひ奴

つゆらかの脊戸と案出て学の月　楚雀
穐一日暮きれ杖と無成ふけり　官父
風一ぬ杖は異さの消えりも　柏梁
蕪は志祈れり霧を志ほる之　蒼山
於中祈は霧り濡と和法如一の縫　闌鴉
いふ書に稲つ刀添て志つ一ぬり　應郁
。
木て花の如ひと いき今案裏の山　枚蓋
人去て萩は月杖となりふ年り　栗下
昼光れ月　袁　和りをおきの風　丈左

龍田舎



五三、〔秋興〕 大江丸等

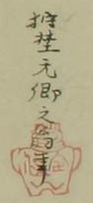
大根引て住らし汁やの
さはらぬ世　大江丸
秋乃色をなしや有田の
冬こもの果　月居
ゆきの松屋にいろはの
もりし故　可董
掌の様ちかし秋乃
さつけられ　大江丸
家をもれく人　悔むや
園のうこよ　この董
員か
かゝ茂川帽子も秋乗
としし忘　月居

龍田舎

五四〔名月探題〕大江丸等　寛政十一年

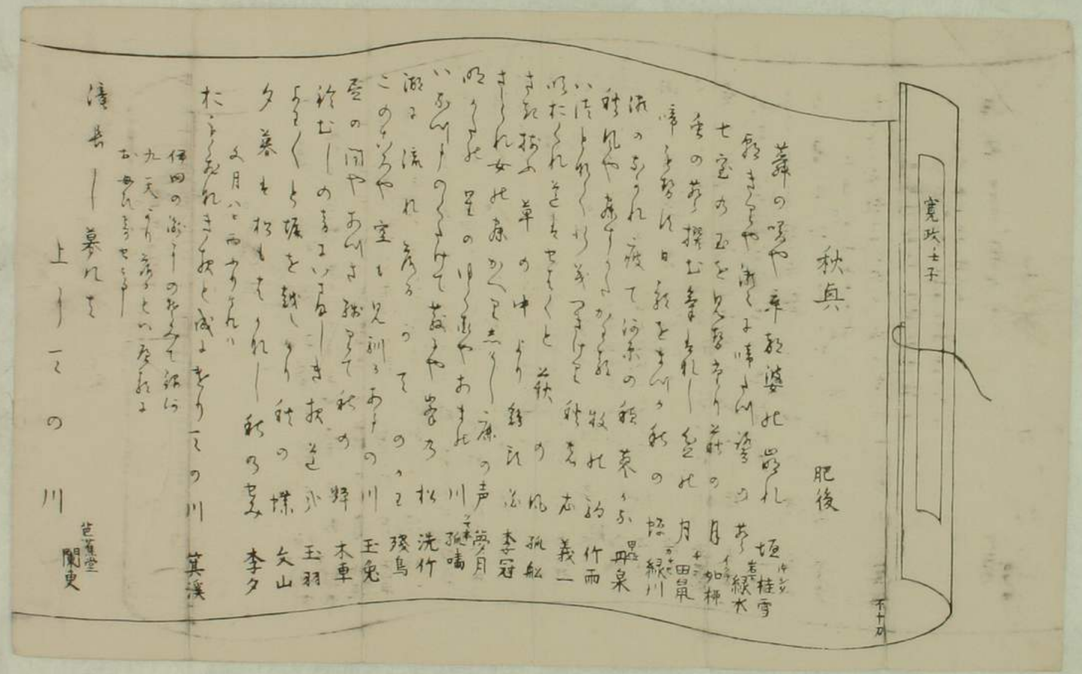
けふの月　夕さめ　おもも
　　ゆきしら　アリヨカ　紫狐部
かしゆかしらしらしらしらの月　かや　紫金
　　須戸の月　浪も　むかしの　きすがたも　蘭芳
名月や　あけちむらまる　あまたひ　李杏
○
　　この月　しらしらし　この　廊　臺几
　　めい月のかけ　あさ　ほの　ちらまる　呉卿
　　帆のうかり　あらしも　蔵し　田霍
　　ハふ九月　　ちかなも　月　ほ　おまれ　かつらなれ　豊甫
　　一天月九外　まし　志計
　　いちつまれ　きのみ　きのふ　ふの月　和十
　　白柳　も　おもむ　船の月見が　頂山
　　めい月や　湖　あり　ら　ゆす　さ　ゆみち　舟圓
　　本庫の　白ひ　よりなる
　　月のしら　素冬
　　ろふ　夜　と　鈴　女　肩も　月　ゆ　羊輪
名月　ゆ　ら　みふ　ふ　ふ
　　ふり　画なし　八十叟　大江丸

已未秋八月望於大伴閣上大江丸伴書



探題吟行
袖ヶ崎
雪迫ぬ湖さゝやかに稲の秋　詩況
銀象
住しらぬ獅子蜂うなる雪の原
廣屋の原
大井
あまの島一田ぶの西よ集ふ　歌白

五六、秋興　肥後幣　寛政四年



寛政十子

秋興

肥後

蒹の喘や草動婆北鳴れ　垣桂雪
露もさそや淋しよ仲秋の月　若緑木
七宝の玉を見る夢探む春　加柳
津を発れ一里の秋の松川　田鼠
秋のふるえ夜て海の松葉ふる　黒泉
村雨や遠くより来る雁の声　牧れ
いたよりくり来る雁の声　竹而
鳴たくれそともさくと秋の風　義一
されば女性あるかくと秋の風　孤松
ゆくまに星のゆくてせまる　泰冠
いるかりつくてせまる　川孤嘯
海と流れ行くこのそうや空と　洗竹
雲の間や鳥の川　琴鳥
鈴むしのまよひ　王兎
夕暮もわもも　木車
又月いでゝ　玉羽
たゞくれまよひ　矢山
伊勢のふるさと　李夕
九天にすゝむとの川　箕漢
清き一夢れを
上一すの川

芭蕉堂閑史

五七、〔秋興〕景山等

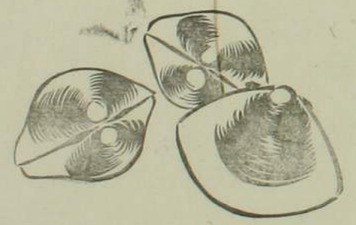
道備の
庭を
洗面社
風情の京

京山

秋乃久遠
砂裳李軍
演栗社評

温山

菓山



五八 登山月詠 虎杖等 寛政十年

龍田舎

五九、〔冬興〕月居等

月居

鷲雪

大江丸

馬印

友國

八千

六〇〔冬興〕大江丸等

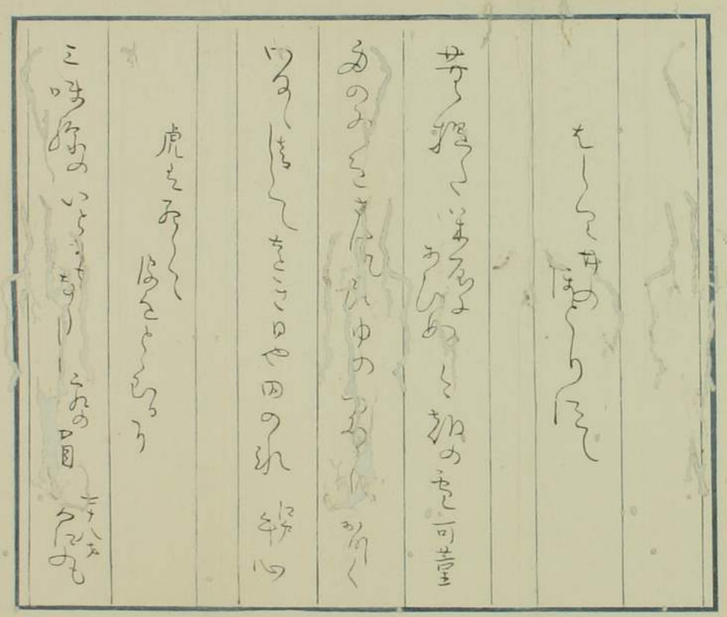
もしらせ井のほとりにて

井を掘て[illegible]あひめ[illegible]の[illegible]可堂

[illegible]のみをさたれ[illegible]ゆの[illegible]

いるしほしてをこ日や田の[illegible]

虎をみしらせ[illegible]



三味線のいとまなし　これの目　[illegible]

[illegible]田[illegible]

六一〔冬興〕旧国等

和雪也我ヶ使ヲ
ワ我ヶゆく　蜂友

もしり雪也占景誓ハ
呉ヘリ遊ヶ丁江

、

和雪といふ口ヌ
さん　鶴日の字

雪のきてまゝ
萍也拓をしたて

ちゝ傳ひと車
却しゆけ　雪のさ

我くに名塩
千彩ゆおれ門

ひるの雪あら
もしり乗し我津時分

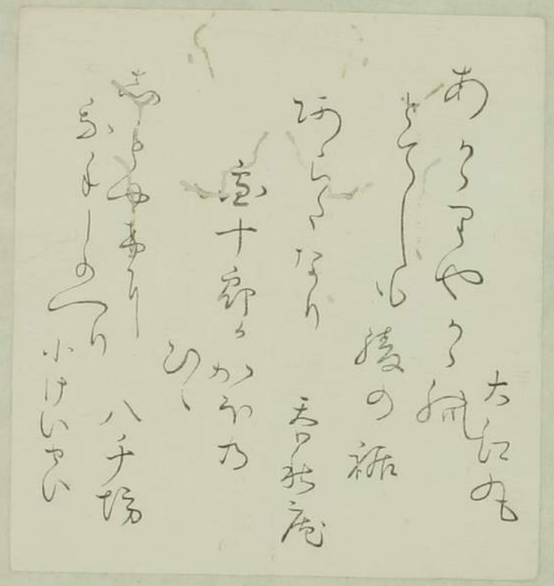
橙乃花あの
寒何里雪れ朝

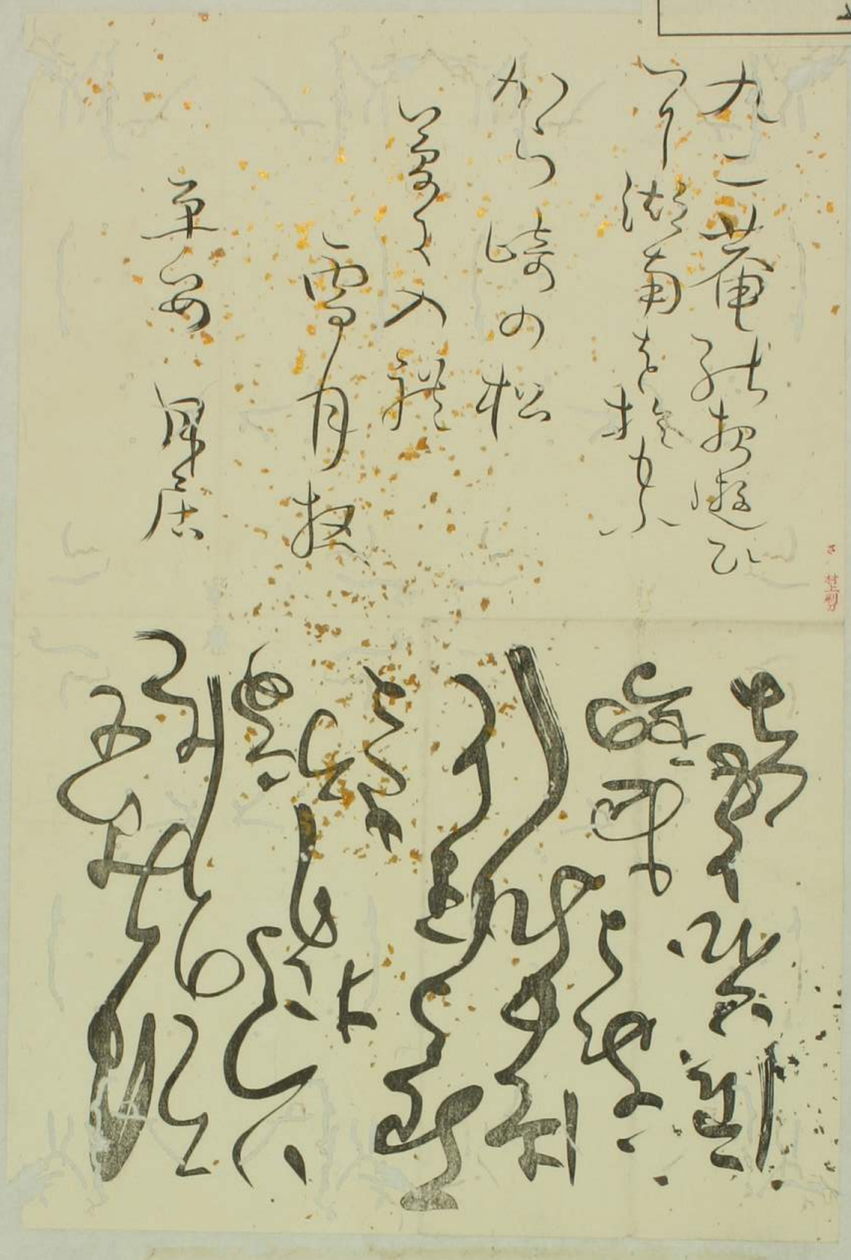
雪れ人はるかに
夢ばを風情之

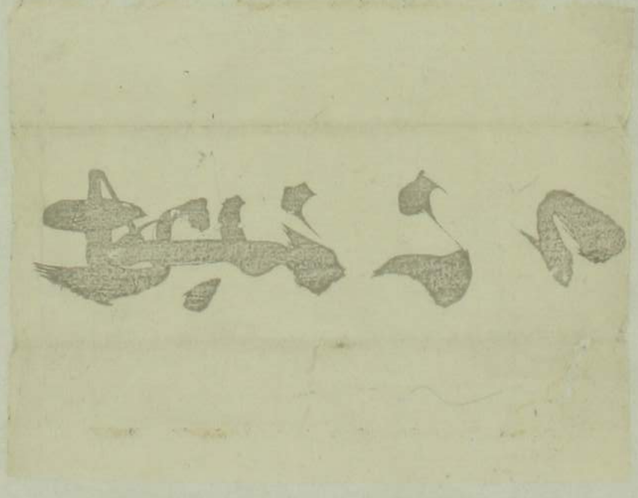
右　月居

六二、〔冬興〕大江丸等

あかつきやうら風も
さらしは猿の袖
ゆらしなり　天下狂庵
宝十郎かかわ乃
ひゝ
志ゝゆあり　八千坊
ちよしのつり
小けいさい





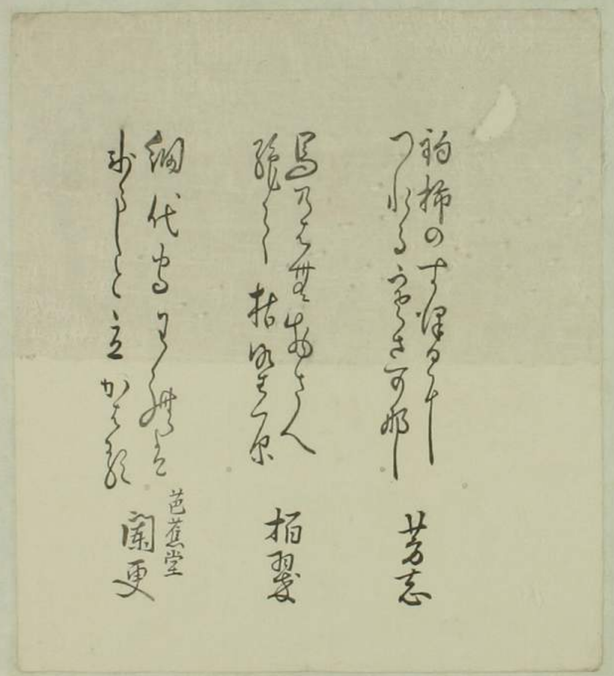


六四〔冬興〕 闌更

初柿のすほるすし
つゝかるうきさ可那　芳志

馬乃ゑ世ぬさん
強しく拈ぬさ尓　栢翠

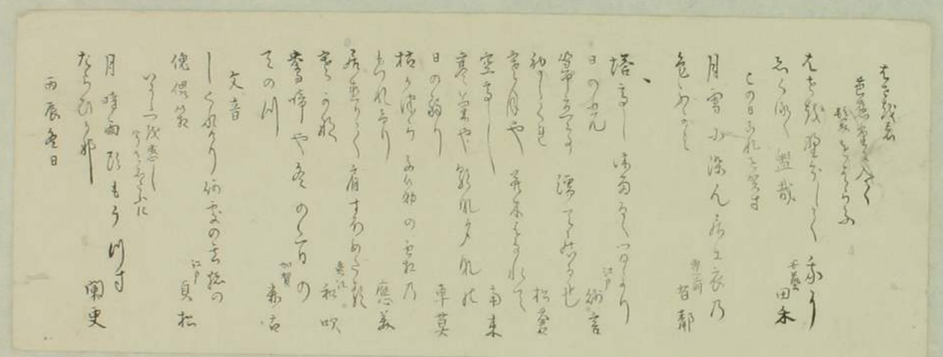
細代ゆるりしめさ
ぬしと立かたる　闌更



芭蕉堂

[illegible]田[illegible]

六五 〔芭蕉忌句帖〕 闌更等 寛政八年



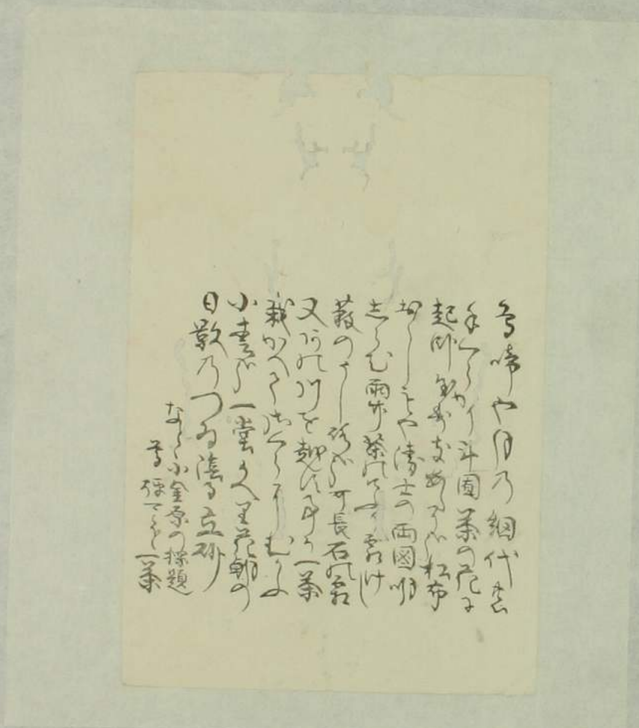
龍田舎

下毛足利牛頭天王
奉納 芭蕉堂 雪中庵両評發句合

ほとゝぎす〳〵あま雲帰〳〵と詠る海 耕雲（惟土 足利）

一家の梢より也帰一花一鶯（ナカノ）
蓑笠のうちほゝ〳〵動也小萩哉（ナリ）毛面（ケヅラ）
格眼のこゝにとゞまりて春の月 英巴（川ニ）
京ちかき海や夏船乗かよふ 南桑（太田）
郭公日暮よあくり 帰昌（小川）
鈴木川筋の里より大雨の後、
沙汰やむ迄名もなき雨の晨 青蒲（太ウ）
暮初しより雨さへ加る雲の月 桐里（サノ）
家ごとにいく歌よりも無村宇（メイ）、
あやめは流ちかき池の月 木奴（メイ）
楊子かりまゐるそうなく夜の月 長眉（正雪）
ほとゝぎす松ちる山よ雲の月 花明（足利）
実の月八ツにかゝる紀春（ノ）
さゞ波の月人住むさとの秋 五渡（メイ）
春の月柳おもるゝしだれより 嫩石（ろう）
やひくき波うつ松もなし 寄蒙（ナカモ）
一ほろ〳〵と宝乃八幡うき月 雪歩（川ニ）
梅もなく〳〵泥沼の月 兎峯（ハウ）
去なくもの哀も果ぬ春の月 楚雲（ナカ）
山ゝ裸の色きよらかに雨の月 一阿（大谷）
ふくろ木や勝乃ふ波の月 雪炊（タイ）
江の船に松ちりかゝる雪あり 勝月（イチノタ）
ひばりなく〳〵野を里あり 貫古（ヒデ）
山寺や中ゆく歌乃ほそき 菜蝶（足利）
ゆく〳〵と雲ほの〳〵と走る 道澄（足利）
四阿やうつゝ雲ゐる郭公 東（浦助）
春の歌也月ともりはてゝ 完来（タロヘ）
蓑笠の旅も月ともる雪の山 雪江（タロヘ）
京ちかき海ほの〳〵と走る 帰朴（足利）
ふるゝ〳〵と雲ほの〳〵と走る 東
帰る也廿夕ともる雪の山 完来
ほとゝぎす〳〵あま雲帰〳〵と詠る海 耕雲（惟土 足利）
寛政九年 卯月 日

六七、小松原探題　一茶等



龍田文庫

六八 題時雨 松坂連

題時雨　松坂連

子得　為貞　佳夕　開樵　乙我　滄波　橙長　甫調　可也　花珉　李石

[illegible]

六九、題雪　尚入寄

題雪

山橋乃斬り刻なりまゝ乃雪　波静
けり雪や渺ゆきとみゝるなと　楚流
ちり雪やまゝ丈なし処雪れなし　素喬
庚申まゝ杖借ゆ来ハ[illegible]　斗南
神拝ゆや積らく人乃歓ひ　五嶺
雪乃日やよく〳〵みきハ我ゝ庵　素秋
葉島ハ一段高しまさ乃雪　不及
先ひとつ中ニ斗里ゆき丸先　寛志
雪乃萩や巻く揺ゆくらるゝ　少示
縄張く客まり庭や雪乃朔　花英
有也あれ物ゆかし根やまさ此雪　文江
明なりと告れや雪乃[illegible]　長布

十二子判詞罪定を賀しく田今一巻を完ま
百余乃甲乙を定む事風流乃一大事とさきハ
巻中ハ[illegible]り浅紀し付句ハ輪回自絶を兼し
曲流乃句調を共ハ[illegible]むことを旨とし性く
同志の一助ふなり人ゆゑ容易乃てふ[illegible]
堂に雀を掘く死活を[illegible]ハ掘きる
人乃手段ゆゑ[illegible]乃市此一物を回むり
[illegible]ハ梯子とのひ或ハ荒とのふ[illegible]
けり雪や傘頼ゆゑ重かしき　尚入

七〇、好文軒月並　寛政八年四月

再文軒月並

勝岡曉　二一里（江戸）　三如黛

卯の筭しいらきまゝ朝とおつふたり　下總嚴　銀江

卯の筭や母のぬる夜日ハ千ん　江戸　魚淵

卯の筭や古ぶりハ是の鍋わらず、　堀芊

国うらや卯の筭数て水清し、　州賀

一夜妻眠ぶ宮ふしや郭ニ　武田端　百武

ほゝ紙ゝ旅のあるまや時ゝる　江戸　岡曉

短夜や気ゝ悲しき通夜の証、

ゝしゝ夜ハ鞍壺ふ眠る花御心、　畚布

こゝしゝ夜といふも悪寝なり人の癖、　如黛

短夜ハ鷲もしるもなりけり、　龍友

竹のあ代家ゝのふきん垣根心、　百之

竹の子や乙六寸より恙ふき、　五凡

齲やゝし歯ゝ竹の子乃ちゝりけり　武府中　由之

三月追加

夜のさくら人ゝまりて見死せ　上州高崎　和栄

しらるゝや老ゝ無祢うひ　判者　芝山坊　耕淵

人ゝしなる

寛政八年卯筭月

七、〔月並〕耕渕撰　寛政十年十一月

[illegible]

猶白之　二　[illegible]　惣連二百十八士

三　歌笛

[illegible]　鳥並　子交　青江　松路　可栄　休更　竜岡　路雄　半輪　蘭雨　花耕　枝鳩　秋花　鴉巣　歌笛　白之　萬郎　来至　園　鳥和　[illegible]　壺半　五棟　同来

[illegible]

寛政十年十一月

[illegible]

[illegible]

[illegible]

七二月次　耕渕撰　六月

[illegible]

猪也好　江戸　岨曉　毛志塩

[illegible]

也好　石魚　岨曉

、湖柳　守角　巣鳥

、帰国　喚之　月樵

六　月次　六

[illegible]

道澄　守角　田舎　梅條　志塩

儿眠　文交

耕渕

[illegible]

猪雨蟬 也好 子雄

炉風やいとゞ日二日ハあつき孤眠 也好

炉ごゝろ花もちよとゝ迄ぬ神 雨声

神の留もぬ迄の灸ハ雨声

るゝ迄ハ龍之

留もぬ神ハ北白比雪江

神の留を蔵一ゐる比獅子ハ 李好

形を傳ふもちよとや神の留ハ 為千

ゝ振り炎しきさ歌笛

ゞれ傳ふ流るゝ迄ハ峒曉

逸ハの旅ゝゝの猪ハ戸

一川ハ出ぬ傳ゝもちよとゝ迄 峯水

ゐも動く炎もの 鳥朝

ようゝまこと炎ハ可栗

隙ゐる留ハ雨眠

ゐ栗ハもふゝ 里井

蜀既ハゐる動ハつゝ 雨蟬

九月遊加

雪ぬ中一箱ゝゝ田郁

鶯鈴の尾ゐ物ゐぬ起ゐゝ 超扇

川動ゐ能ゝ迄ゐゝ

耕潮

七四、月並三月ノ部　一無庵撰

月並　三月ノ部　一無庵撰

鶯や茶をくらはて帰し流す　可董
よし人の素足も見られ保生が　五原
あつさ茶と白ひもありて屋さ九ん　魯竹
白妙の茶のあつさや浅黄そら　イセ楚雀
梨子のそれ新しききんの姿、　柏梁
さらさを喰伏家ゐてやしゝ夕ゝ　座笑
茶ゐれ月を見ゐ出れ夜ゐが　仝
なしの茶只ゐ白きもおゐ花なり　五原
そけ山や唯一色ゐ瀬濁咲　座笑
秋雲や桑摘味ゐ賤と臭　仝

深ろしと根笹ゐ落て春ゐ雨　五陸
生姫ゐ杉苗植て春惜む　桃江
山ゐや蕨こもおゐ浜小志つゐ　柏梁
雛市ゐ宅俵らゐ二日月　上ゐ百童
植無しむらし人語きさらな、　如旭
しゐやいつこよ茶来流れ唄　五原
雲ゐ茶ゐ薨き見て山ゐつゝ　桃江
菊植てゐ小く降ぬ春ゐ雨　柏梁
森深津ゐ芍や春ゐ雨二日　ハリニ梅彦
蚕創里志つゐな茶昼ゐ鐘　蝶亭

後記四月ノ部十日限　入料五句三分

七五「月並」其風撰　寛政十年十一月

[illegible]

逢上　東西葬ハ未上通リすり百牧

[illegible]

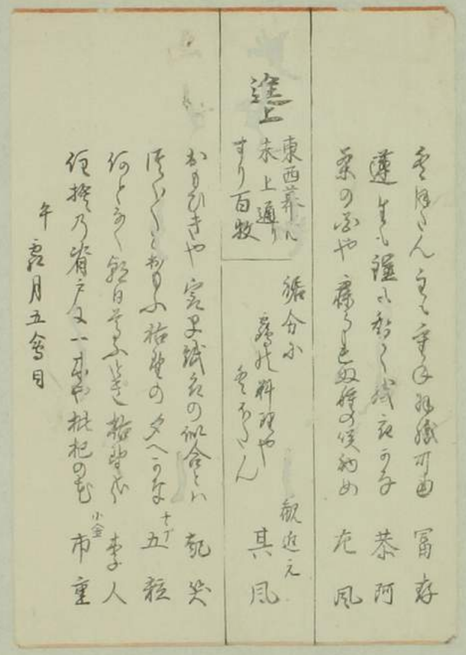
[illegible]

午　[illegible]月五[illegible]日

[illegible]　冨存
[illegible]　恭阿
[illegible]　左風

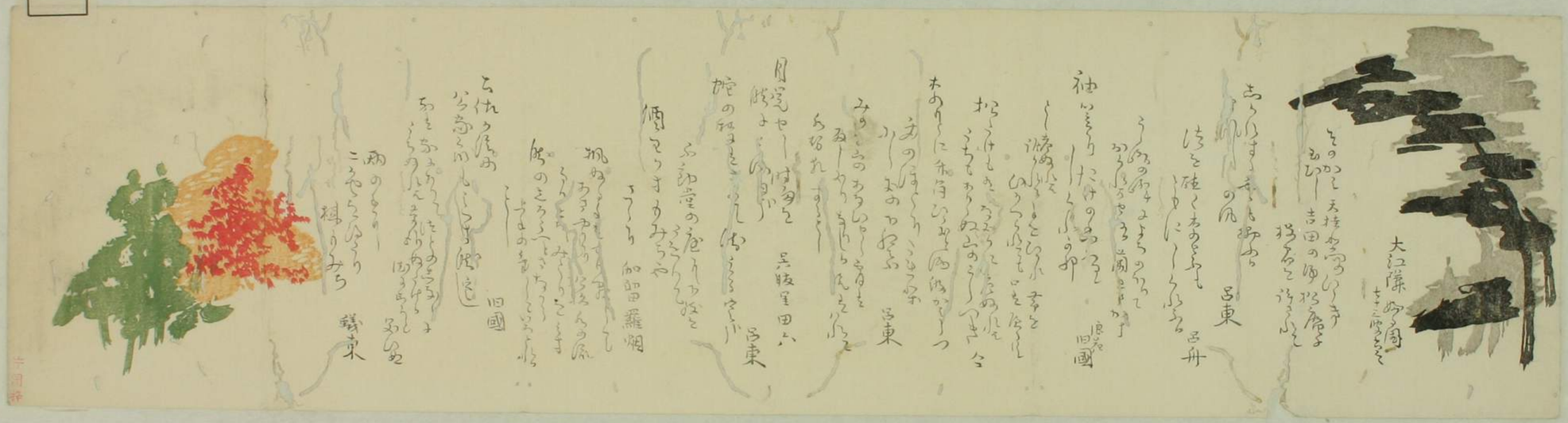
[illegible]　[illegible]近え　其風

[illegible]　[illegible]笑
[illegible]　十ブ　五粒
[illegible]　[illegible]人
[illegible]　小金　市重

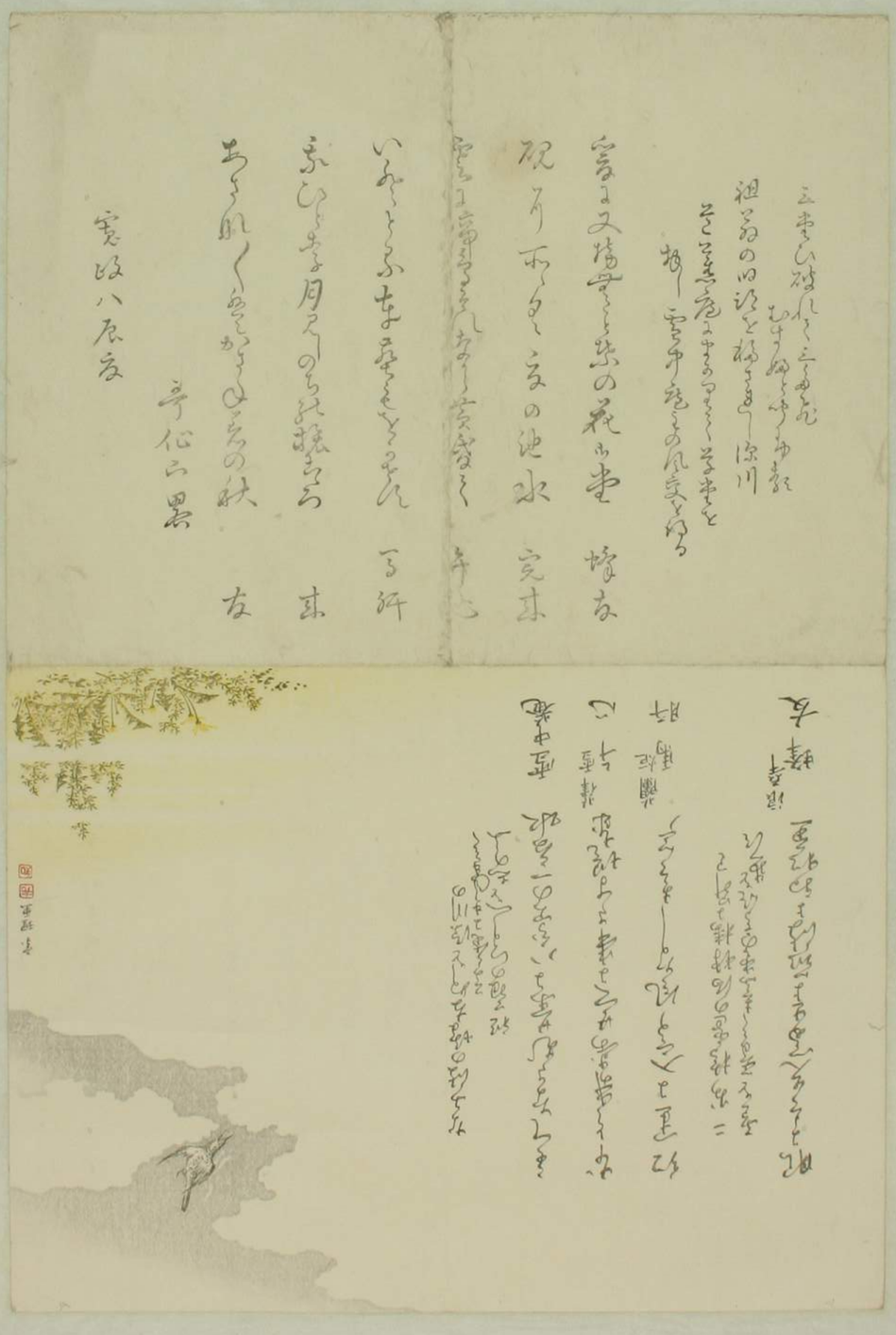


[illegible]

七六〔陽松庵句会句帖〕旧国等

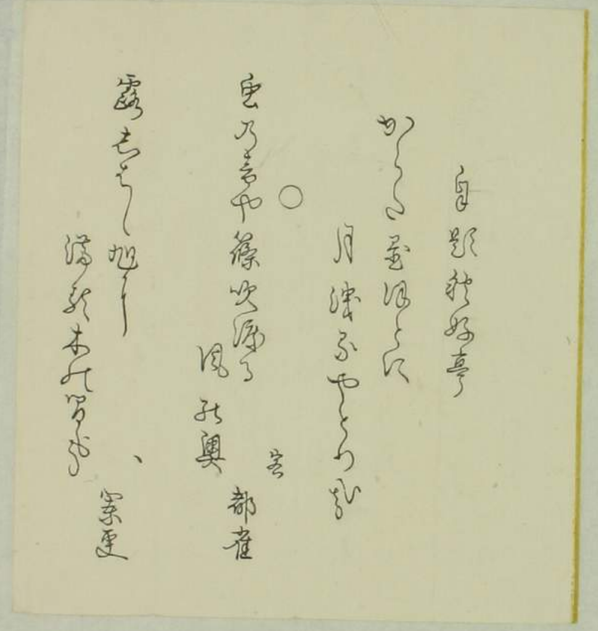


16



77

寛政八年 俳句 俳友録 さ



八〇 〔湖舟追善句帖〕

空外淨雲居士　六月廿六日不祿　行年七十二

辭世　三途ゆく　いまや遊ん　蓮は舟　湖舟

意父のゆつりは偈に

讓しあらし廠の羽織の色を代　祇雁

はかなさは殿帳中や家の前　文里

以下各追悼

諸ともに結んでの清水式　貞行

常基のひとむしろ夕ゝ風　一瓢

風蓋れ花無なきのと利根の水　傘叩

蓮咲や清きは浮む花の氣　麦母

ふ海夢は蜂も涌徑や西の氏　匕耕

行えい蓮の臺の雨とすれ　三好

葛水のかゝらぬ吱は手向式　白洞

友ぞとりかゝる原の浦淋し　禾水

私ひのしひしも蓮の蕚式　三省

入月は言傳もなき夕雨ミ　左來

又通

蛟は隣男は入むひしや音信ぬ　柳東

雨しさの人思ふ色し夜のうち　五渡

、

蛟迫しあれ夜ひとかは蘋の鳴れ　月樵

、

耐は此の辭啼ひし　催主　止丘

浪号は月句はあらず語よ

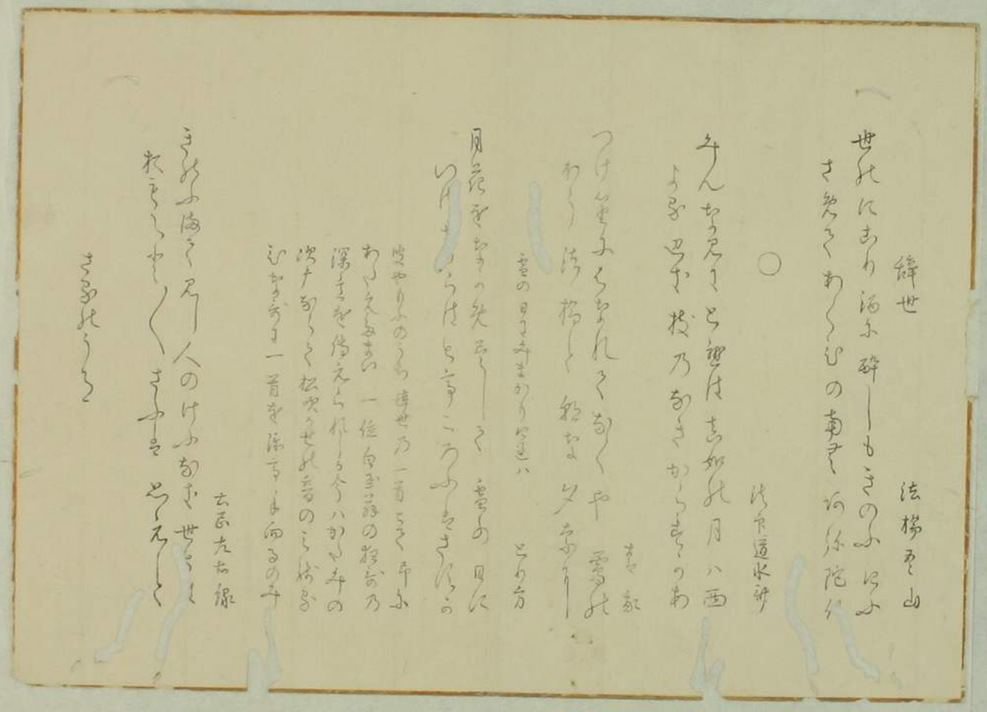
二子のもふいまきうく

空外は手向や淨き雲は峯　仝

寛政隣兆執徐夷則

嘯雲常和我后居士追悼

八三、〔吾山追善狂歌〕



辞世　法楊吾山

世れにあり酒ふ辞しもきのふ　にふ
さ笑ひあくむの事ぞ　河原院作

○　法下道水評

みんなゝ君と世は　志如れ月ハ西
よる　巳ず　枝乃なきからきのあ

つけ筆ふくなれて　なく　や　雲れ　春氣
わり　法楊し　粕なし　夕　あり

雲の日ゝ　みまかり　ハ　とり方

月花をおもの　笑ひして　雲の　日に
いけ　ちらは　と　事こ　ろふ　きさらの

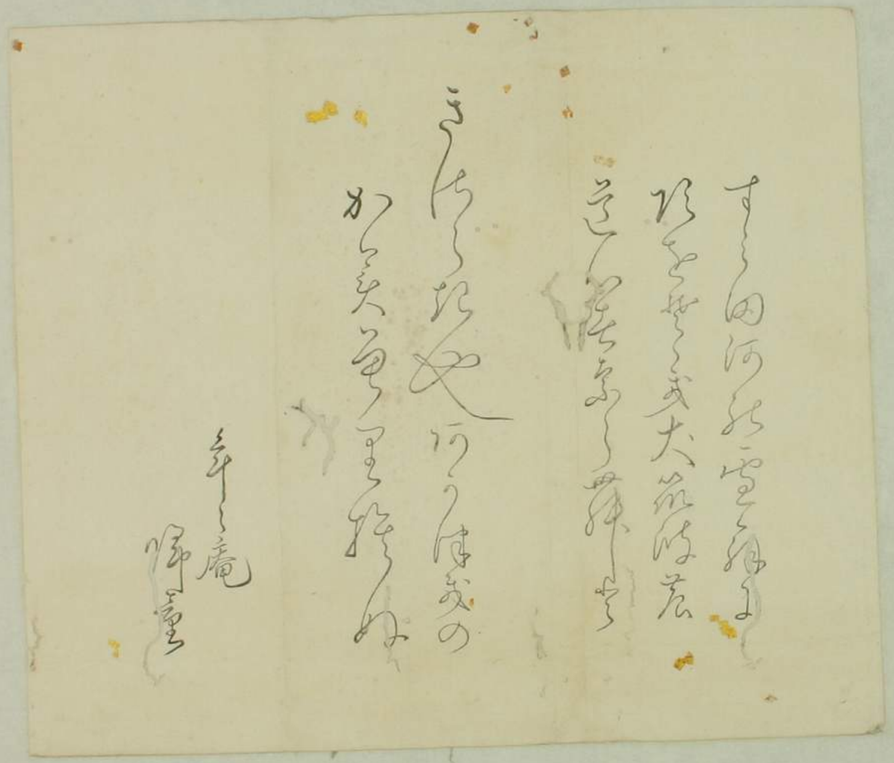
皮やりふのうち　辞世乃一首　こゝ　平ふ
あらえ　みあ　一位白玉蘇の　粕なり乃
深さを　偽えられしか　今ハかゝ　みの
次ナ　なりて　松吹ゝ　世れ　音のこ　ゆゑ
むなかる　一首を　深さ　ま　向るの　み

きれふ　海ゝ　君　人のけふ　なき　世ゝ　と　去岳左右線
れ　ゝ　ゝ　ゝ　さふ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

さるれうる

龍田文庫

八四、〔歸童薙髮發句〕

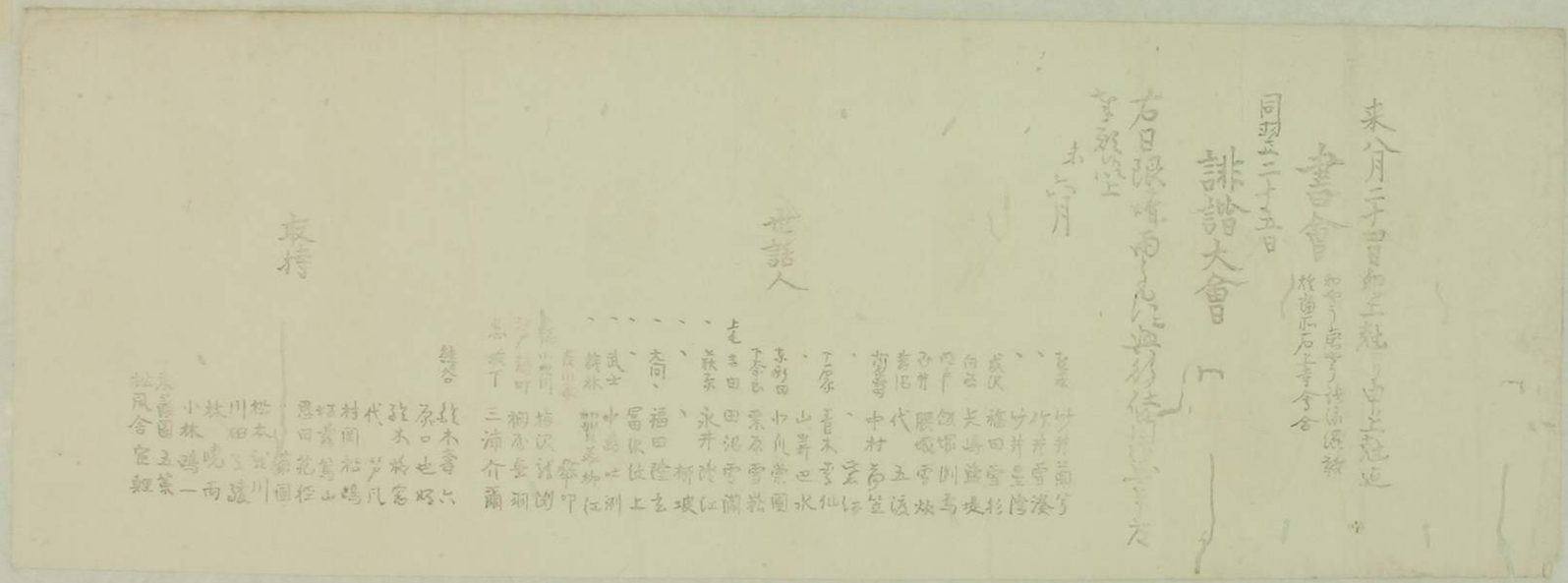


龍田舎

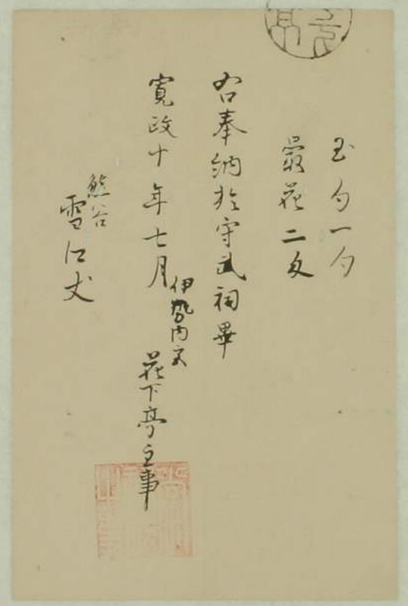
留別

二夜菴 貞松

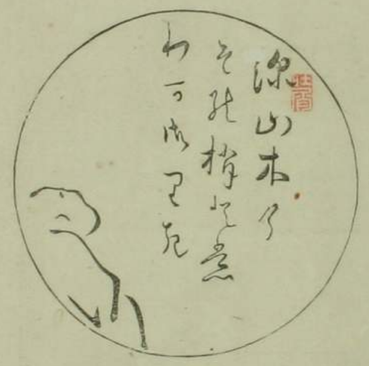
八六、（書會俳諧大會通知狀）



八七、〔奉納受取〕



八八［包紙］



八九.〔包紙〕